

Cosmic Philosophy & UFOs

GAP-JAPAN
NEWSLETTER

宇宙哲学とUFO

月はUFOの基地!?

私は異星人に守られている

美しき惑星の思い出

テレパシー開発法

SUMMER
1983

81



＜巻頭言＞アダムスキーは真実なり	1
月はUFOの基地!?	久保田八郎 2
私は異星人に守られている	岩崎敏夫 10
美しき惑星の思い出(2)	中川真理子 16
＜さらば空飛ぶ円盤(9)＞	
形而上学、心霊学、宗教	G. アダムスキー 22
＜改訳＞テレパシー開発法	G. アダムスキー 26
日本GAP機関誌80号、静岡支部報50号発行記念会	32
北海道特別夕食会、第4回松山支部大会	33
読者の声「コスミック・ポスト」	34
＜予告＞昭和58年度地方支部大会(その2)	35
「エルサレム宇宙考古学の旅」説明会案内	36
＜予告＞エルサレム宇宙考古学の旅	38
日本GAP全国月例研究会案内	40



GAPとは

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がUFOの真相について“知る”機会を与えられるべきであるという見地に基づいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて“コスミック・パワー”の子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界(惑星)から来る友好的な訪問者からもたらされた“生命の科学”の研究と理解を通じて体得できます。

日本GAPの目的はUFOとスペース・ブラザーズ問題に関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星群には偉大な発達をとげた人類が居住しているが、米ソ等の大国政府はこの真相を隠している。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト(接触)しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の精神の向上と地球の輝かしい未来を築くために不可欠のものである。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

■表紙写真は月面の「雲の海」に続いて古い地形を示す高地帯。バロマー天文台撮影。

近來一部のUFO研究者たちによるアダムスキー非難が高まっていると聞いている。むかしからそうだったが、この非難攻撃は、惑星探査機によって太陽系の地球以外の惑星に人間のような知的生命体は存在しないということが「判明した」という時点から激烈になったらしい。

うるさいほど繰り返すことだが、これら一連の惑星探査機による調査結果として米ソ両国の当局から流される情報なるものはきわめて信憑性に乏しくて、そのまま鵜呑みにするわけにはゆかないのである。彼らは他の惑星に関する重大きわまりない情報をひた隠しにしているのだ、としか思えないフシが多々あることは、海外で膨大な資料や情報を入力してきた編者の断言してはばからないところである。本号のトップ記事「月面はUFOの基地」にしても、アダムスキーの体験記の内容が真実であったことを裏付けている。あの記事はれっきとした情報にもとづいて書かれたもので、この資料はまだ日本では翻訳出版されていないと思う。加うるに、編者をも含むある人々の非常に特殊な「体験」により、この太陽系の地球以外の各惑星に偉大な文明を築いた人類が存在していることは疑い得ない事実と考えられるのである。

だが想像を絶した高度な進化をとげたこの「異星人」は、みずからの存在を全地球人に容易に示さない。これは地球人に恐怖を植えつけて大混乱を発生させぬようにという配慮にもとづいているためである。そして地球の大国の為政者のある人々も太陽系の地球以外の惑星に偉

大な人類が存在することを知っているけれども、政策上どうしようもないのだと、先年アメリカで聞いたことがある。

多年アダムスキー支持活動をやつてきた結果、編者はある興味深い事実に気づいている。アダムスキーの体験記の内容を事実と信じて支持するか、それともあたまから否定して嘲笑するかは、個人といわゆる学識教養とは関係なしにきまるという事実である。これは高度な学問を身につけている人に信ずる人が少なく、そうでない人が信じやすいという意味ではなく、吸収している既成の知識の如何にかかわらず、信ずる人は信ずるし、信

〈巻頭言〉

アダムスキーは 真実なり



じない人は信じない、ということなのだ。したがって学歴が高く、特に国公私立の有名な大学出身者でもアダムスキー問題を信ずる人はいるし、学歴の低い人でも信じない人は信じない、という実状なのである。

したがってアダムスキーを「素朴な人々をだましした詐欺師」と呼ぶUFO研究家の表現はあまりにも感情的であつて妥当ではない。なぜなら、いわゆる一流大学出の人が「素朴」であるとは思えないからだ。編者の知る限りでは、有名人でアダムスキーに関心を持つ人は意外に多いのだが、いずれも立場上、公言しな

のである。特にある種の学者や政治家の名を列挙すれば、言いたい放題のことを言っているUFO研究者こそ自分が素朴であることに気づくだろう。

人間の世界においてそれが賢明でそれが愚劣であるかを判定することは人間自身にとつてむづかしいことなので、いちがいに人間の「程度」を中古車のごとくランクづけるわけにはゆかない。しかも地球人の知識たるや大同小異で、さほどの差はない。高度な学校教育を受けなくても驚くほどの知識と技術を持つ人はざらにいる。

しかし、通常、人間が気づいていないある法則が存在し、これによって人間の持つ「何か」に差が出てくると考えられている分野がある。それは次のとおりだ。個人が一生ににおいて何かの物事に打ち込むようになり、抜群の業績をあげる場合、それは必ずしも今生（この生涯）だけの努力と研鑽の結果ばかりではなく、過去世から持ち越してきた知識や実績などの影響もあるという考え方で、これをわれわれは宇宙哲学的に「過去世からのカルマ」と呼んでいるのである。業績ばかりではなく今生における一個人の思想や生活環境なども、大体に過去世からのカルマの影響によるという。

したがって今生における学校教育や知識教養などとは無関係に、宇宙的な思想を持ち、特に地球以外の惑星の素晴らしき文明に思いを馳せて、これに関するインフォメーションを自己の精神の糧にしようとする人は、それなりの理由を過去世からのカルマに負っていると考えられ

るのである。

これはきわめて一般受けしない哲学的思惟であり、またこれにともなつて転生（生まれかわり）という思想も関連して複雑になるので、ここでは詳述できないが、この問題はいずれ二十一世紀の重要な課題となるだろう。

アダムスキー問題に関しては、この「過去世からのカルマ」が不可欠な要素をなしているようだ。同じような環境に育ち、同じようなIQで一緒に教育を受けながら、Aは文句なしにアダムスキーの体験記を受け入れ、Bは中間の懐疑派となり、Cはまっとうから否定して反対論者となる。これは知能の差ではなく、感覚の差といえるのだろうが、その感覚の奥には不可解な神秘的要素がひそんでいる。としか思えない。

以上の説は科学的に説明されたわけではないので、科学一辺倒側からみればまだも否定のタネになるかもしれない。しかし数百年、数千年後には科学で立証されるだろう。偉大な惑星の人々はすでに科学的に説明しているらしい。

ひとつつ言えることは、アダムスキーの膨大な文献の内容はおそろしく深遠であり、現代の学問のレベルをはるかに超えているという点である。だがある宇宙開発科学技術者によると、地球の科学はアダムスキーがむかし述べた別な惑星の宇宙船の有する科学技術の方向へ間違いない進展しつつあるという。これからみるも空想であればとすごい体験記が書けるはずはないということである。もつと目を開こうではないか。

月はUFOの基地!?

日本GAP会長 久保田八郎

アポロ宇宙飛行士たちが月面で見た不思議な建造物は何を意味するか? 月世界の驚異的事実をここに暴露!



●アポロ17号のコーン・コックス船長

「おい、すごい物があるぞ!」

「何だ、何を見たのか?」

「月面上のすごい物体だ」

「その異常な物はどこにあるのか?」

「すぐ知らせてくれ」

「あなたが次に上空を通過するとき知らせよう」

一九七二年十二月、アメリカの月探検アポロ計画の最後を飾る宇宙船アポロ十七号が月の「静かの海」付近のタウルス・リトロウ溪谷に着陸して、月面に降り立ったユージン・サーナンは、驚愕して司令船のパイロット、エバンズに呼びかけた。巨大なUFOを見て腰を抜かしたのだ。

報告を受けたロナルド・E・エバンズは目を皿のようにして下方を見つめた。「やーっ、着地点に輝く物が一つ見えるぞ。彼らが何かを燃やしたのかもしれない!」

エバンズは米本土ヒューストンの管制センターに向かってどなった。「彼ら」というのは月面に降りたアメリカ人たちではなく、他の「何者か」を意味するらしい。

センターから声が返ってきた。

「了解。おもしろいぞ」

「わーっ、信じられないことだ! いまオリエンタルの緑の真上にいるんだが、下を見たら、また閃光が見えたんだ」

「了解。わかった」

「小川の端の所だ」

「また確認するチャンスはあるか?」

「オリエンタルの東側だ」

「ウォストローク(ソ連の宇宙船)ではな

いのか?」

「絶対違う! 地図でその位置を確認する必要がある」

エバンズも月面上に輝く大UFOを目撃して、興奮しながらヒューストンへ連絡した。この交信では「キロ」とか「ブラーボ」という暗号が使用されたが、これは月面上のUFOを意味する語だ。アポロ十七号による月探検行で結局エバンズはUFOを二回見たし、同行した科学者のシユミットも一回見た。

だが、いずれの宇宙飛行士も嚴重な箱(箱)口令により、地球へ帰還後は黙秘して語らなかつた。

アポロ十七号だけではない。それ以前の連のアポロ関係宇宙飛行士たちもほとんど全員が、宇宙飛行中または月面でUFOその他の構築物を目撃しているのだが、「他言してはならぬ」と厳命されている」と、トップクラスの宇宙開発科学者、ゲリー・ヘンダーソン博士が言っている。

結局、アポロ宇宙飛行士たちの月面着陸の様や会話は、いったんアメリカのセンターでチェックされて、UFO目撃などの異常な体験に関する部分はひそかに削除され、さし置きのない箇所だけをつなぎ合わせて、ディレイド・システム(時間的に少し遅らせて公開するシステム)により世界のテレビ画面に流しているのである。

こうして地球人のほぼ全部が、月面には何もないと信じきっている実態には驚くほかない。米当局の隠蔽策はまんまと図に当たった。

宇宙空間のホタル火現象

前出の宇宙飛行士たちの交信記録は極秘裡に保管されているのだが、アメリカの研究家ドン・ウィルソンが多数の秘密情報類を入手して Our Mysterious SpaceShip Moon(謎の宇宙船「月」)と題する著書で公開したが、これは驚嘆すべき内容を含む書物だが、なぜか一般に広まらなかった。それよりもアメリカが実施した壮大なアポロ計画による月着陸の大実験自体がもはや風化してしまい、人々の記憶から薄れてしまったので、月面で何があったのか、大衆はせんさくもしない。こうして一連の驚異的な事実は闇から闇に葬られてしまった。

アメリカの初期の有人飛行計画であるマーキュリー計画では、まずチンパンジーでテストしたあと、一九六一年五月五日にシユパード中佐のMR三号、七月二十一日にはグリナム大尉のMR四号が約十五分ずつの弾道飛行をなした。これが有人弾道飛行の最初で、続いて六二年二月にジョン・グレン中佐の乗り込んだフレンドシップ七号が地球をまわる有人軌道飛行に成功し、グレンは一躍英雄となった。

地球へ帰還後、グレンは驚くべき事実を発表した。暗黒の宇宙空間にホタル火のような沢山の発光体が浮遊するのを目撃したという。これはすでに出来わっていたジョージ・アダムスキーの「宇宙からの訪問者」に述べられた記述と一致するというので、当時わが国でも週刊誌な

どが大々的に取り上げて報道した。世界のUFO研究界でもアダムスキーの真実性が立証されたとして話題になったものだ。

これにこりた米当局は、以後宇宙飛行士にたいして、よけいなことをしゃべるなど厳命するようになったといわれている。

前年の六月一年五月、ときの米大統領ケネディーは議会で演説をし、六〇年代末までにアメリカは月に人間を着陸させると言明。これにより月着陸有人飛行計画が決定して、宇宙開発科学者の総力を結集してスタートした。

その前にマーキュリー計画を受け継いだジェミニ計画なるものが六五年から六六年にかけて実施され、一、二号は無入三号で有人飛行になり、六六年十一月の十二号まで成功している。これは軌道上の宇宙船同士のランデブーとドッキングの実験を主体にしたもので、このあとアポロ計画へと移行したのである。

宇宙飛行士たちは頻繁に UFOを見た

大気圏外へ飛び出た男で最初にUFOを目撃したのは、マーキュリー計画でフエイズ七号に乗って地球を回る軌道に乗ったゴードン・クーパー少佐である。

一九六三年五月十五日、ハワイ上空を四回目に通過中、彼は奇妙な言葉を受信した。この録音テープは帰還後NASA(米航空宇宙局)の言語専門家が分析したけれども、地球上のいかなる言語でもないことが判明した。

不思議な体験はこれだけではない。彼が地球を回る最後の飛行としてオーストラリアのパーズ上空を飛んでいたとき、不気味な物体が接近して来るのを見てキモをつぶしたのである。このUFOはパーズ付近の追跡ステーションにいた二百名をこえる人々も目撃している。

「かなり大きな物体で、私の位置よりは高度にあった。このボギーは星その他の自然物、または地球の人工の物体でもない」とクーパーは述懐している。「いまままで地球のまわりであまりにも多くの不可解な未確認物体の目撃例があったので、地球以外に高度な知的生命体が存在することはもう否定できないんだ」

ボギーというのはNASAで使用している暗号で、UFOを意味する。彼らはUFOという言葉を使用しないで種々の暗号を用いて交信したのである。

マーキュリー計画終了後、前述のようにジェミニ計画が始まった。ジェミニとは星座のふたご座のことで、衛星船はマーキュリーよりも一段と大型化して、重量三・二トン。タイタン二型ロケットで打ち上げる。

ところが、この宇宙船に乗り込んだ飛行士たちの全員も大気圏外でUFOを見たのだ。NASA当局は極力否定し続けたが、ついに宇宙飛行士によるUFO目撃事件について公表した。それは六六年六月一日のことで、ジェミニ九号打ち上げ後、突然電波妨害が発生して、宇宙飛行士たちが数度UFOを目撃したと言明したのである。

その前年の六月にさかのぼると、軌道

を飛行中のジェミニ四号に乗っていたジェームズ・マクディビットとエドワード・ホワイトは、ハワイ上空を飛行中にタマゴ型の光る物体が接近して来るのを目撃し、それを映画に撮影した。このUFOからは大きな腕のようなものが数本突き出ていたという。

だが地上に帰還後、このフィルムはNASA当局が隠してしまい、あとで写真分析係が公開したときは、マクディビットが見た物体とは全然違う物にすり替えられていた。

続くジェミニ五号でもクーパーとコンラッドが三個のUFOを目撃し、七号になると宇宙飛行士フランク・ボーマンとジェームズ・ラベルが衛星船の近くに不思議な小型物体群と巨大なUFOを二機目撃した。これは六五年十二月のことで、それまでのアメリカによる宇宙開発史上最大の謎の一つとされた。

このときに乗員たちは宇宙空間に無数の光る微粒子が浮いているのを見た。これはグレン中佐の見たホタル火現象と同じものだ。

宇宙飛行士によるUFOの目撃例はまだ山のようにある。箝口令はしかれていても交信記録は地上の管制センターに残されるので、そこは神様ではなく人間の集まりのことゆえ、秘密にされていてもしよせんは洩れるのである。

月面の驚異の物体

こうしてアメリカの宇宙開発は着々と進展して、やがて月へ到達する日が来た



▲月の裏側の人工建造物？（アポロ宇宙船より撮影）

が、ここではもつと驚異的現象が待ち受けていた。最初に述べたアポロ十七号の月面におけるUFO発見もそうだが、月に第一歩を印した十一号のアームストロングが「これは人間にとって小さな第一歩だが、人類にとっては偉大な飛躍だ」という有名な言葉を伝えたのはよかったけれども、どっこい、すでに別な惑星か

ら来たと思われる「人類」が飛躍していたのだ。
アームストロングとオルドリンの二人は失神しそうなほどに驚いた。「静かな海」の着陸地点の彼方に浮き上がったクレーターの縁に、なんと巨大なUFOがずらりと並んで、二人を見おろしているではないか？

だれもいない筈の、死の世界と思われていた月世界に人間がいた！
「巨大な物体（複数）が見えるぞ。ああ信じられないほどだ！ 別な宇宙船群がいるんだ。クレーターのむこう側の縁に並んでいる。月面上にいて、我々を見ているぞ！」
しかしこの驚異的な報告もNASAはひた隠しにして、地球へ帰還しても絶対にしゃべるなど二人に命令した。もちろんUFOが並んでいる場面はカットされて世界の茶の間のテレビに流されたのである。
六九年十一月十四日に打ち上げられたアポロ十二号も、まもなく二機のUFOにつきまともわれて船内の電気系統が故障した。しかもUFOの一機は長時間十二号と並行して飛んでいた。
アポロ十六号もデカルト・クレーターの付近に着陸したときに、白色とピンク色に輝く多数の丸い物体がいるのを、船長のジョン・ヤングと着陸船パイロットのチャールズ・デュークが目撃して仰天した！ 一九七二年四月二十二日の交信で彼らは管制センターにこのことを伝えた。上空を飛ぶ司令船キャスパーに乗ったトーマス・マティングリーも、デカルトの地域に閃光を放つ物体を見ている。ところかもつと驚異的な光景が展開して、センターへ報告するデュークの声は興奮のあまりうわづつた。
「わーっ、あのドーム（複数）は信じられないほどだ！ ドーム群のむこう側に構築物が峡谷の中へ伸びており、頂上に伸びているのもある。峡谷の北東側の壁

は輪郭が見えない。北東の方にトンネル（複数）があり、北へむかってそのトンネルが約三十度曲がっているぞ！」
この驚くべき光景は、すでに何者かによって月面に人工的な建造物が建設されていた事実を示している。
ソ連がやったのか？ 違う。当時ソ連も非公開でソユーズ有人宇宙船により月着陸やドッキング、長期軌道飛行など一連の実験を続行していたが、月着陸でアメリカにはるかに先行してこのような建造物を設置するほどの技術や国力は到底なかった。だいいち、ソ連が月に基地を設けるとすれば、もつと秘密裡にやるだろう。
着陸船オリオン号のデュークは更にストーン山から外を見ながら「さえざられた平地」。「海岸」。「ベンチ」などの奇怪な言葉を地上との交信で発している。しかも月面から百二十キロメートル上空を飛んでいる司令船のマティングリーも不思議な光景を見た。あるクレーターが大洪水のように見えて、何かの物質が外部へ流れ出ているとか、逆に内部に吸い込まれている部分もあるのだ、外側のもつと高い部分（複数）の頂上にもそれがたまっているなどと伝えて、すごく不思議な光景だと述べている。

謎の「トラック」の意味

アポロ十七号が月に着陸して巨大なUFOに遭遇したことは最初に述べたが、飛行士たちは水の跡も発見している。鮮明な水流の水位マークを見つけたという

のだ。これからみると、月は水も何も無い固いコンクリートのような岩盤から成る世界だという古い天文学上の概念は完全に間違っていたようだ。というのは宇宙飛行士たちが歩いた月の地面は砂漠地帯で、しかも彼らのクツの跡まで鮮明に残るのだ。乾燥しきつた砂ならばクツの裏の模様まで残るわけがない。おそらく湿地帯のような場所なのだろう。ということは砂地に水分が含まれているにちがいないのだ。

十七号のシュミット飛行士は興奮して叫んだ。

「トラック（複数）が見えるぞ！ クレーター（複数）の壁まで続いている」

この「トラック」という言葉が実際には何を意味しているのか、さっぱりわからないが、なにかの驚異的な人工建造物を見たことはたしかである。というのはアポロ十五号も七一年八月一日に不思議な物を月面で見て、これをやはり「トラック」と表現しているからだ。

アーウィンが管制センターと交わした記録は次のとおり。

「傾斜を降りるにつれて「トラック」があるぞ」

「その跡をつけてみる」とセンター。「了解。かなり長い。こんな物にはとても勝てないよ。ハドレー山上にまで数か

れているんだ」

同僚のスコットも叫んだ。

「こりやすごい光景だノ」

「ほんとに美しいなあ」

センターが叫んだ。

「機構について話してみろ」

「こんな見事な構造物はいままで見たことがないよ」とアーウィン。

「幅がみな一定しているぞ」とスコット。

「各トラックの頂上から底まで、こうまで同じ高さでそろっているのを見たのは初めてだ！」とアーウィンが感嘆の声をあげる。

いったい二人は何を見たのか。「トラック」だけでは意味不明だが、途方もなく壮大な建造物を見たことはまちがいない。暗号でごまかしているのか。

十七号のシュミット飛行士の報告にたいする管制センターの応答も奇怪な暗号の連続だった。

「きみの写真はピアースとピアースのあいだをいつているぞ。ピアース・ブラーボ。ブラーボへ行け。ウイスキー、ウイスキー、ロメオ」

月面上の不思議なドーム、その他の異様な物を発見したのは、宇宙飛行士たちが最初ではない。実は数世紀にわたって地球より望遠鏡で観測され確認されていたのだ。特に多かったのは奇妙な光点の発生である。

イギリスのトップクラス天文学者パトリック・ムーアと、米アリゾナ大学の月・惑星研究所のパラ・ミドルハースト教授による研究によれば、月面の異常現象について天文学者が報告した例は、過去四百年以上の長い時代にわたって、約四百例あるということになっている。

その観測者たちのほとんどすべては誠実な

な科学者であったと、「サイエンス」誌に掲載された二人の論文で述べてある。

その中で注目すべき報告例を二、三挙げてみよう。

イギリス最大の天文学者の一人、ハーシェルは、一七八三年の月食の最中に不思議な輝く光体を望遠鏡で観測したと報告した。

（注）フレデリック・ウィリアム・ハーシェルは一七三八年ドイツに生まれて後にイギリスで大成した大天文学者。天王星の発見者として名高い。

この光体は一個だけではなかつたらしい。一七八七年八月十八日には、「灰で薄くおわれた炭火のような」輝く光点群を見たという。結局ハーシェルは七度の機会に同じような光体を月面で発見したのである。そして「何者かが月面上の空間を移動しているようだ」と述べている。

しかも一八二一年の十一月には一カ月のうちに彼は類似の光点群を月面に連続三回見た。

もともとハーシェルはイギリスで宮廷オーケストラのオーボエ奏者をやっていた音楽家であった。音楽理論で必要な数学を学び、更に光学を研究して望遠鏡に関心をもつようになった人で、天文学は独学で身につけた、いわばアマチュアである。しかし好奇心と直感力は抜群で、この太陽系の地球以外の全部の惑星に人間が住んでいると信じていた。四百三十個もの反射望遠鏡を製作し、最大のものは口径五十五インチ（百二十五センチ）に及ぶ大望遠鏡がある。天王星ばかりではなく、妹のカロライン・ハーシェルと

共に観測研究を続けて、実に二千三百個の星雲や星団を発見し、天文学史上不滅の名を残した。一八二二年に八十四歳で没し、妹は二十六年後に九十八歳で兄のあとを追った。星雲の発見には妹の力が大であったといわれている。

その他にも月面における不思議な光体の発見例は沢山ある。「世界の天文学者はUFOを見ていない」という説はまっかなウソだ。古くは一五八七年の五月にイギリスの一科学者が、新月の両端の中間点に輝く光点を発見したと報告している。

以来十七世紀、十八世紀、十九世紀を通じて月面の奇妙な光体現象が観測され続けた。一部の天文学者は月の火山活動だろうと推測したけれども、ハーシェルも見たように移動する光体もあるので、火山活動としてはかたづけられない。知的生命体によって操作される、なにかの発光体が月に存在していたとしか考えられない。

近代における月面の謎の現象で最大のものとして、名高い「オニール橋」がある。これも現代人に忘れられようとしているので、ここに実状を再録することにしよう。

今を去る三十年むかしの一九五三年七月二十九日の夜、ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙の科学部長であったジョン・J・オニールは、愛用の三インチ屈折望遠鏡を持ち出して月の観測を開始した。目標は月面の東側のリム（縁）に

巨大な謎のオニール橋

共

に

観測研究を続けて、実に二千三百個の星雲や星団を発見し、天文学史上不滅の名を残した。一八二二年に八十四歳で没し、妹は二十六年後に九十八歳で兄のあとを追った。星雲の発見には妹の力が大であったといわれている。

その他にも月面における不思議な光体の発見例は沢山ある。「世界の天文学者はUFOを見ていない」という説はまっかなウソだ。古くは一五八七年の五月にイギリスの科学者が、新月の両端の中間点に輝く光点を発見したと報告している。

以来十七世紀、十八世紀、十九世紀を通じて月面の奇妙な光体現象が観測され続けた。一部の天文学者は月の火山活動だろうと推測したけれども、ハーシェルも見たように移動する光体もあるので、火山活動としてはかたづけられない。知的生命体によって操作される、なにかの発光体が月に存在していたとしか考えられない。

近代における月面の謎の現象で最大のものとして、名高い「オニール橋」がある。これも現代人に忘れられようとしているので、ここに実状を再録することにしよう。

今を去る三十年むかしの一九五三年七月二十九日の夜、ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙の科学部長であったジョン・J・オニールは、愛用の三インチ屈折望遠鏡を持ち出して月の観測を開始した。目標は月面の東側のリム（縁）に

共

に

観測研究を続けて、実に二千三百個の星雲や星団を発見し、天文学史上不滅の名を残した。一八二二年に八十四歳で没し、妹は二十六年後に九十八歳で兄のあとを追った。星雲の発見には妹の力が大であったといわれている。

その他にも月面における不思議な光体の発見例は沢山ある。「世界の天文学者はUFOを見ていない」という説はまっかなウソだ。古くは一五八七年の五月にイギリスの科学者が、新月の両端の中間点に輝く光点を発見したと報告している。

以来十七世紀、十八世紀、十九世紀を通じて月面の奇妙な光体現象が観測され続けた。一部の天文学者は月の火山活動だろうと推測したけれども、ハーシェルも見たように移動する光体もあるので、火山活動としてはかたづけられない。知的生命体によって操作される、なにかの発光体が月に存在していたとしか考えられない。

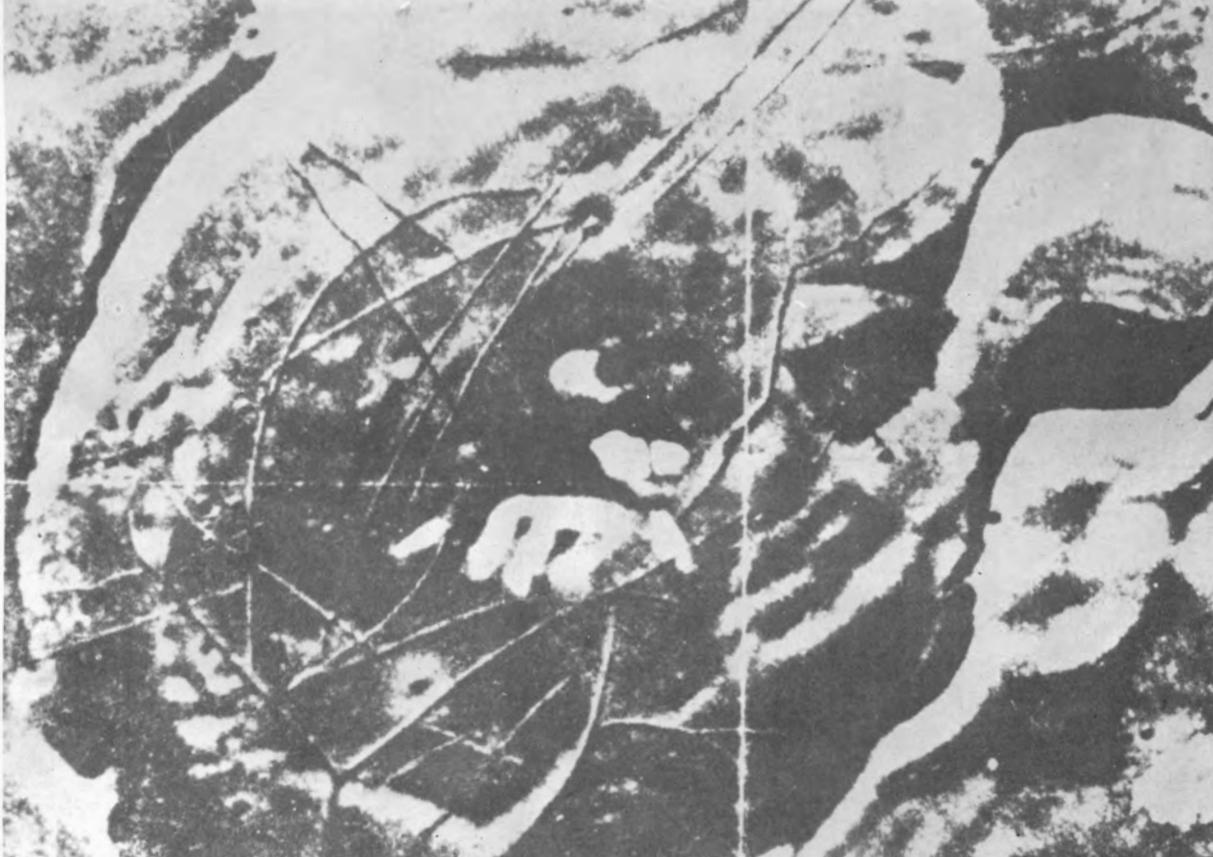
近代における月面の謎の現象で最大のものとして、名高い「オニール橋」がある。これも現代人に忘れられようとしているので、ここに実状を再録することにしよう。

今を去る三十年むかしの一九五三年七月二十九日の夜、ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙の科学部長であったジョン・J・オニールは、愛用の三インチ屈折望遠鏡を持ち出して月の観測を開始した。目標は月面の東側のリム（縁）に

共

に

観測研究を続けて、実に二千三百個の星雲や星団を発見し、天文学史上不滅の名を残した。一八二二年に八十四歳で没し、妹は二十六年後に九十八歳で兄のあとを追った。星雲の発見には妹の力が大であったといわれている。



▲1930年代にアメリカのローウェル天文台が撮影した月のガッセンディー・クレーター。内部に奇妙な白いスジが見える。人工建造物か？

近い「危機の海」である。海といっても本物の海ではなく、月面で黒く見える平坦部だ。

アイビス（接眼鏡）をのぞいているうちに、彼はハッとした。それまで見たこともない異様な物体が見えるのだ！高い山と山とのあいだに長さ約二十キロもある細長い物体が橋のように横たわっているではないか？

彼はわが目を疑った。光学的なイルージョンではないかと思つたが、何度のぞいても物体は見えるのだ。そこは以前にたびたび観測した地域で、こんな物は存在しなかった。

不思議な物の出現に首をひねりながらも彼はこの状況を月・惑星観測家協会へ報告し、「巨大な自然の橋」と書いた。

だがこれは多数の天文学者の猛烈な攻撃の的になった。そんな物がその地域に存在するわけがないというのだ。

しかしまもなく天文学者連は沈黙した。イギリスの高名な、月を専門とする当代一流の天文学者H・P・ウィルキンズもその巨大な「橋」を見たと公表したからである。群小のプロ・アマ天文家を蹴散らしたライオンの出現というところか。彼はこの「橋」を「月面における最も驚くべき、謎の、人工建造物と思われる現象の一つである」と述べている。

これに追い討ちをかけたのがイギリス天文学協会のトップクラスの科学者、パトリック・ムーアで、彼もこの不思議な物体を観測したと報告したのである。これでオニールは助かった。誤認の汚名を着せられずにすんだばかりか、この物体

は「オニール橋」と呼ばれて語りつがれることになった。

しかし謎は続いた。この「橋」はオニールが発見してから忽然と姿を消したのである。これは到底自然現象とは思えない。明らかに人工的な物体である。

アダムスキーの体験は 真実だった！

以上で読者はもうお気づきだろう。地球人類が月へ到達するはるか以前から月世界には「だれかが」いたのだ。その「だれか」とは別な惑星から来た、月を基地としてひそかに居住し、活動していた異星人ではあるまいか。地球から望遠鏡で観測され続けた月面の「動く光体」とは、彼らの発光する宇宙船ではないか。そして巨大な「オニール橋」も異星人から来た大母船ではなかったか。

これについてはUFO研究界の大先駆者、ジョージ・アダムスキーが一九五五年に刊行したInside the Space Ships（宇宙船の内部）今年五月上旬、文久書林より刊行のアダムスキー全集第一巻、「宇宙からの訪問者」中に第二部として改訳を収録）の中に、彼が土星の母船に乗せられて宇宙空間から月面を観察した記録があり、これこそ過去の天文学上の観測や宇宙飛行士たちの月世界探険による驚異的目撃などで裏付けされていると思われるので、次にその部分を掲げよう。

※

土星人パイロットが言う。「私たちは月からそう遠くない位置にいます」

この言葉聞いて私は興奮に震えて、そこへ着陸するのではないかと思つた。「いいえ」と彼は言う。

「今回は着陸しません。月には空気がありません。それを記録できるほど接近してきますから、本船の装置によつてそのことがわかります。」

空気というものは本来他の天体を観察するのに障害にはならないのです。

地球からは月の上空を動いている厚い雲（複数）が見えませんが、地球の科学者たちは、ときたまいわゆる「ゆるやかな空気の流れ」を観測しています。特にいわゆる「クレーター」と呼ばれる谷のポケット地帯の中にです。

たしかに彼らが見るのは動く雲（複数）の影なのです。地球から見える側の月面には実際の雲（複数）を見るチャンスはあまりありません。これは雲が濃密にならないからです。ところが月のリム（縁）のすぐ向こう側の、温帯ともいえる部分の上空には、地球の上空の雲と非常によく似た濃密な雲が形成され、それが流動したり消滅したりしているのがこの装置でわかります。

地球から見える側の月面は地球の砂漠地帯にたとえればよいでしょう。

（注II）アポロ計画よりかなり以前にアダムスキーが「月面は固い岩盤である」という従来の天文学上の説とは異なる状況を述べていたことは注目にあたいする。しかも砂漠地帯説は後にアポロ飛行士たちに実証されたのだ。また月面上空の雲も飛行士たちが撮影している）

月の中心部には美しい地帯があつて、

そこには草木や動物などが生きていますし、人間も快適に生活しているのです。地球人さえもそこに住むことができるでしょう。人体というものは宇宙で最も順応性に富んだ一種の機械なのです。

月は全く生きた天体で、人間を含む生命を支えているのです。私たちは月のリムのすぐ向こう側の、温暖ながら少し冷たい地域に一大研究所を建設しています。月は地球や私たちの惑星ほど多量の空気を持ちません。これらの天体よりもはるかに小さいからです。それでも大気はあるのです」

近距離にして月を観察する装置が調整されると、私は地球に最も近いこの天体に関する地球人の概念が完全に誤っていることを知つて驚いたのである。クレーターの多くは、実際には過去における月の内部のすさまじい隆起によつて形成された、けわしい山に囲まれている大峽谷なのだ。地球から見える側には、かつて多量の水が存在したと思われる明確な跡を見ることができた。

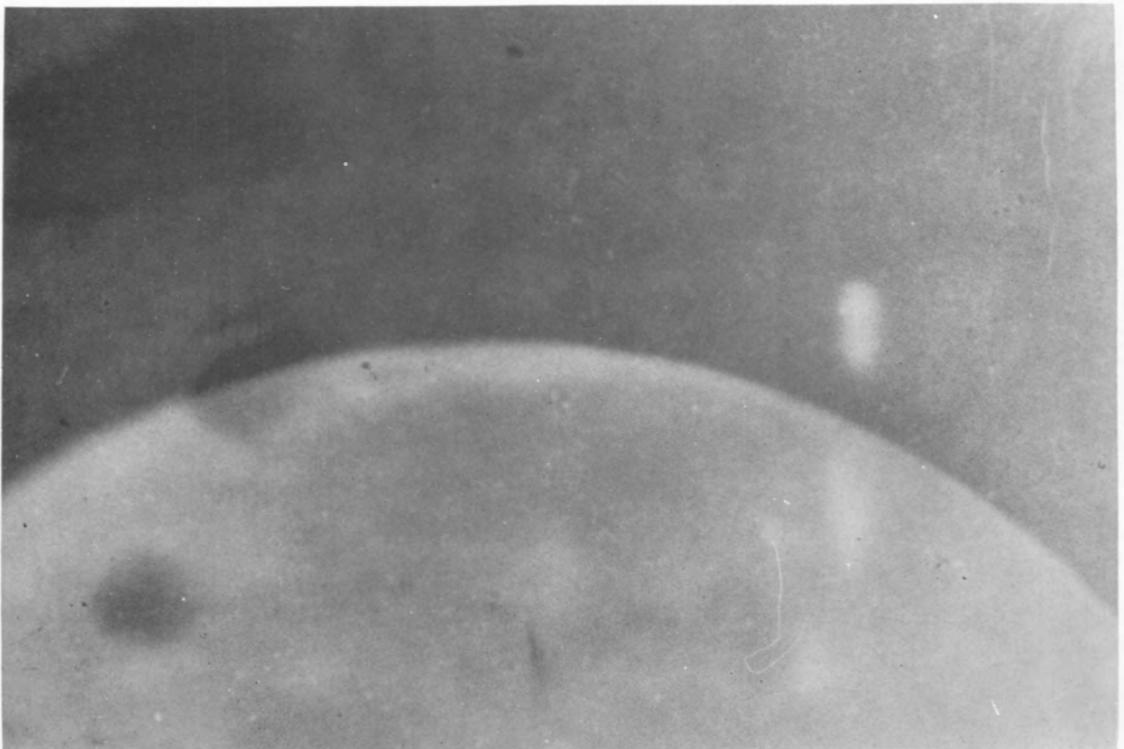
ズール（異星人）が言う。

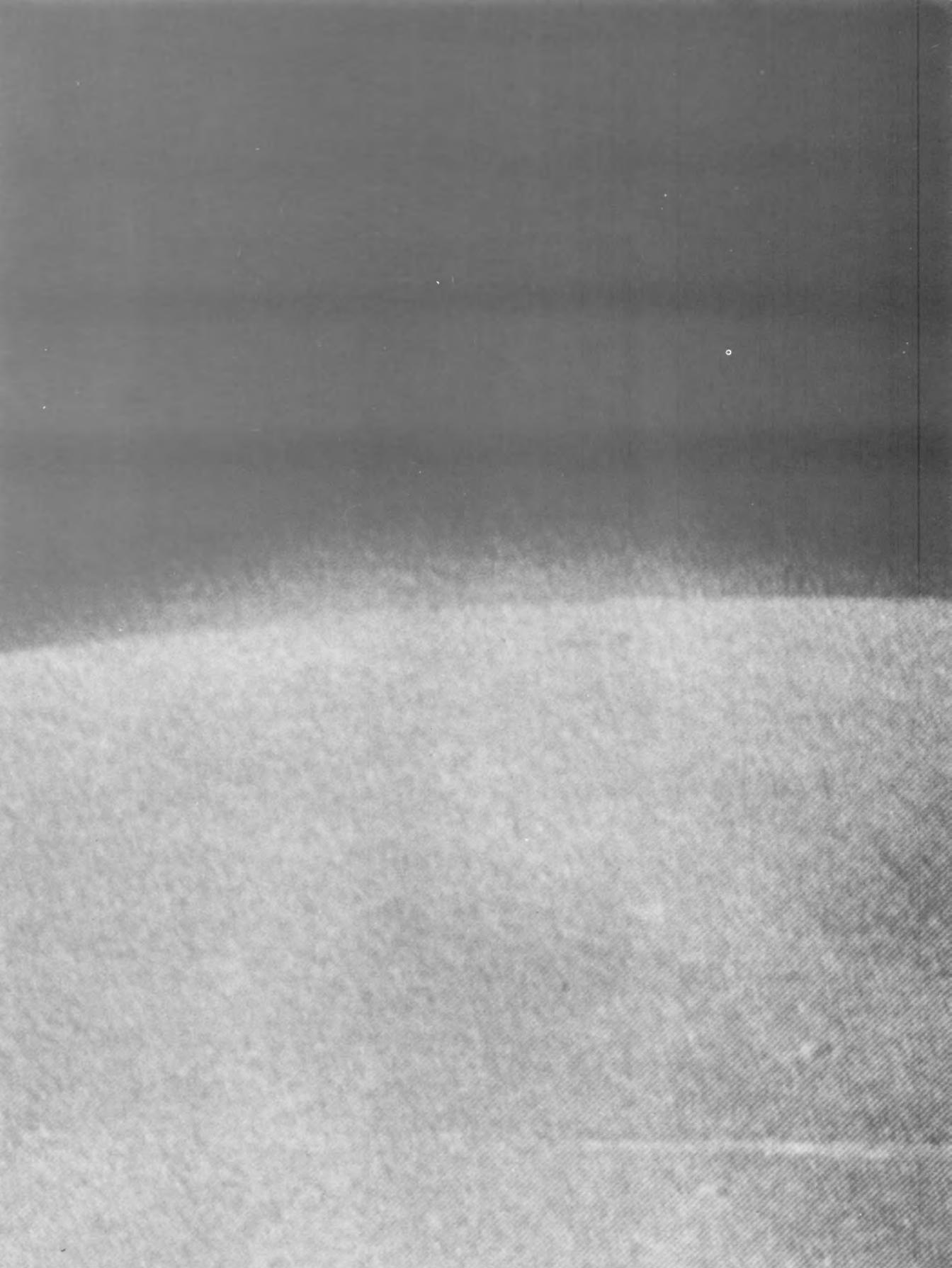
「月のこちら側の山々の中にはまだ多量の水が地中深く含まれています、向こう側にも沢山の水があります」

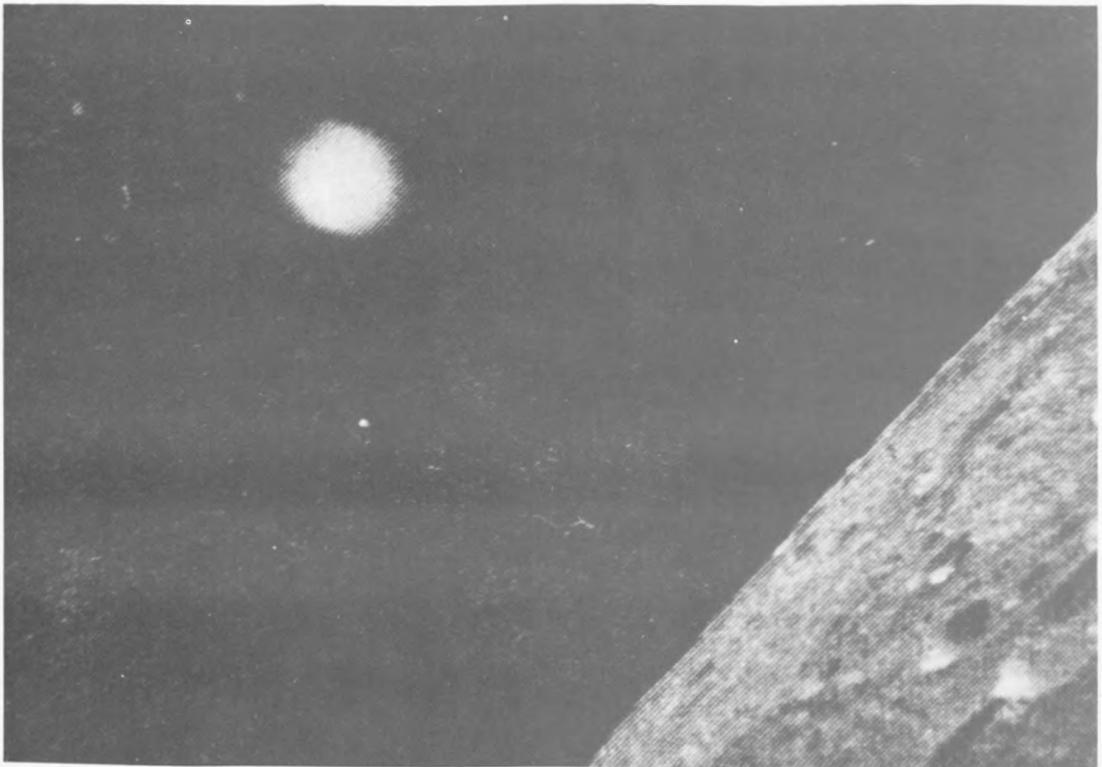
続いて彼はクレーター群で囲まれた山々の斜面に、大昔の水流のはっきりした跡があることを指摘した。

続いて眼前のスクリーンに映される拡大された月面を見てみると、地面や深い谷の中などを通っている深いスジ（複数）に気づいたが、これは過去の大水流で作られたものにほかならない。

▼アダムスキーが6インチ反射望遠鏡で撮影した月面付近を飛ぶUFO。







▲月の上空を飛ぶUFO。アポロ宇宙船より撮影。

(注) こうした水流の跡もアポロ飛行士
によって確認された)

この地域にはまだあちこちに非常に小さな植物帯があるのが見える。その地面の一部分は美しい砂粉状だが、一方、粗い砂、または細かい砂利に似た大粒の石を敷いたように見える部分もある。じつと見つめていると、その見つけていた地面を一匹の小さな動物が走って横切った。毛皮の四足獣であることはわかったが、走るスピードが速すぎて、どんな動物かは見当がつかない。

※

アダムスキーによると、月面にはすでに大昔から別な惑星の人々が建設した基地があり、月の裏側には都市があつて、人間が快適に生活しているという。ただし大気が薄いので、着陸してから宇宙服なしで地面に降り立つには、二十四時間を要する体内の減圧処置を受ける必要があるといっている。これも医学的には全くの不可能事ではない。いずれはこのような装置が開発されるだろう。

なぜ政府は隠すのか

こうなるとアダムスキーの偉大さよりもむしろ、一般大衆の好奇心の乏しき、宇宙にたいする関心のなき、当局の声明や一部科学者の所説についての盲信ぶりに言うべき言葉はない。

それはともかくとして、米ソ両大國政府はなぜ大氣圏外の真相を隠すのか。理由は明白だ。巨費をかけた「軍事目的」を有する宇宙開発の大実験の真相を正直

に洩らすわけがないのだ。しかも恐怖心のかたまりみたいな地球人に「月やその他の惑星に偉大な文明を築いた人間が住んでいる」と公表しようものなら世界的なパニックが発生して収拾のつかない状態になるだろう。大國の為政者はバカの集まりではないので、その点も計算ずみなのだろう。とすれば現在の隠蔽策はむしろ賢明といえるかもしれない。

「死人の箱に十五人
ラム酒一本ヨーホーホー」

ロング・ジョン・シルバーの率いる海賊の一味は、目指す宝物の隠し場所へ来たけれども、穴はすでにだれかに掘られて、中にもぬけのカラだった。失望した海賊たちの耳に不気味な歌声が響いてくる。

ステイヴンソンの名作「宝島」では間の抜けた連中の狼狽ぶりが見事に描かれているが、貴重な無機物の宝庫と思われた月へ最初に降り立ったアポロ十一号の飛行士たちが地球へ持ち帰ったのも、わずかに二十キログラムの石ころだけだった。そして数百億ドルの巨費をかけたアポロ計画は十七号でもつぱたり打ち切られた。なぜか?

この宝島に、すでに何者かがやって来て資源を占有していたことを米政府が知ったからではないだろうか。

二頁の写真は「月(写真集・朝倉書店刊)」より。その他は筆者が特殊なルートから入手したものだ。

輝く円盤の出現と異星婦人の来訪後、
テレパシーで重要な通信が
始まった。

私は異星人に守られている



岩崎敏夫

静岡県磐田市在住の筆者は大正九年生（六十二歳）の日本GAP会員で、少年時代から旧軍隊を通じて種々の超常現象の体験を経てこられたが、戦後は更に不可思議な体験を持つことにより宇宙的な良き運命が展開してきたという驚異的な人生をすごしてこられた方である。

× × ×

九死に一生を得る

むかしの第二次大戦中、私は旧軍隊にいて、いろいろな不思議な体験があつて、いぶん助かってきました。まずその話からしましょう。

若い頃に旧制中学を卒業して東京のある旧制大学の専門部を受験しましたが、一度すべて二度目に水産講習所（現・水産大学）の養殖科を受けて学科は合格したんですけど、体重不足ということで不合格になりました。

それから家の手伝いをやることにしました。親父が蘭鑄（金魚の一品種）が好きで、一反ばかりの土地に三畝ぐらいの池を作って蘭鑄を飼っていたんです。その手伝いです。

そうこうしているうちに昭和十七年四月に徴用がきて、名古屋の愛知時計電機へ入ることになり、ここの工場の事務所に勤めたのです。ここは飛行機のプロペラを作る所で、隣の工場が組立工場で、艦載機の組立をやっていました。

そのうち八月十日にそこを徴用解除になって軍隊に召集されました。そして静

岡の歩兵連隊に入隊し、一カ月の訓練を受けてから北支（現在の中国北部）へ出發しました。そのときは生きて帰るつもりは全然なくて、夜中に出發したんですが、東海道線の線路が自宅のすぐそばを通っていて、三間に四間の石倉があるのですが、それがチラリと見えて、ああこれが見おさめかと思いました。

そして朝鮮半島から満州（現在の中国東北）をまわって山海関へ行つたんですが、山海関の駅へ着いた直後に——貨車で輸送されたんですが——私の乗っていた車輛のすぐ前の車輛が狙撃されてそれに乗っていた兵隊はみな死んだらしいのです。だから車輛が一つ違っていたら私はどうなつたかわかりません。これが運命のわかれざわです。

不思議な声が聞こえる

それからだんだん北支から西へ移動して内蒙古の高原地帯の厚和という町へ行つたんです。そして更に烏蘭花というちよつとした町に日本軍の兵営があつて、そこにしばらく駐屯していました。そこで一中隊ほどで警備していました。

私はどちらかといいますと他人と争うことはきらいですから、軍隊にいた若い頃はいつもにこにこしていたために、上官の上等兵から「おまえはいつもにこにこしているが、軍人はもつと口を引き締めてしっかりした態度をするべきだ」と怒られたものです。

すべてそんな調子で銃剣術もきらいだし、大体に「戦う」という精神がないも

のですから、毎日殴られました。でもそれほどこたえませんでした。夜、内務班で整列して殴られるときに（编者注「これは旧軍隊で、鬼の時間」または「地獄の時間」と呼ばれて兵隊の恐怖のひとときとされた）暗い場所ですと殴られたときに目から火花が散りますが、あれを見て殴られながら喜んでいたらような状態でした。

だから苦しみを楽しみに替える方法を心得ていたわけで、わりと楽でした。大体、私の体は当時体重が四十七キロぐらいいしなく、体力がないものですから、何をやってもアゴを出すんです。

（编者注「アゴを出す」というのは、「へたばる」という意味の旧軍隊用語）行軍をやればアゴを出すし、何をやってもだめなんです。でも実弾射撃をやればすごくよい成績をあげました。それも自分の標的でなく、隣の標的にあたるんです。

そんな具合で軍隊生活ではいぶん苦労しました。これは昭和十九年の一月の頃で、そのあと大本営より部隊に命令があつて南方の島へ行くことになりました。それで装備が全部支給されました。

ところが「明日出發」というときに中止になって原隊へ復帰しましたが、その前に厚和へ出て雪の中で毎日訓練をやりました。それが体にこたえたとみえて、体を悪くして、ある日入院を命じられたのですが、その一週間ぐらいい前に、夜、寝ていましたら、次のような不思議な言葉が耳の中で聞こえたのです。「おまえは軍隊にいても役に立たぬから

帰してやる」

これは一種のささやきの声みたいなものでした。もしたら一週間ぐらいたつてから病院行きを命じられました。いつもアゴを出しているものですから、古い兵隊がもうだめだと思つたのでしよう。こんな話はあまりしたくないので、いままでだれにも語りませんでした。

結局、助かった

それから厚和の病院へ入つたのですが、その当時、華南作戦が始まりました。私のいた部隊は泉五三二六部隊です。私は第二中隊にいました。

その作戦が始つてから負傷者が沢山出たために病院をあける必要が起つたんです。したがつて重傷患者優先で、次々と内地に送還したわけです。私もその一人として北京の病院に転送させられました。その間にもずいぶんいろいろな話がありますが、それは省略しましょう。北京の病院に入って一週間ぐらいたつたある日、軍医が病室へやつて来て、「いまからおまえたちを万寿山へ連れて行くから、行きたい者は申し出よ」と言うんです。万寿山というのは有名な行楽地です。

そこで患者の兵隊たちは大喜びして、さほど体の動かない者までわれ先にといつせいに参加しました。残つた者はほとんどいないような有様です。

私はそのとき考えました。人によつてはさういふかもしれないが、これは内地へ帰す者と、こちらへ残す者との選

り分けだな、と。それで行けないこともなかつたのですが、私はやめたのです。そうしたら次の日に呼び出しがあつて、

軍医の前に引き出されて、「おまえは内地に帰りたいか」と聞かれるものですか、「早く治つて第一線に帰りたい」という意味のことを述べましたら、次の日に「おまえは奉天行きだ」と宣言されて、万寿山へ行かなかつた少数の兵隊だけはみな奉天へ還送されました。無理をして万寿山へ行つた連中は原隊へ帰されました。あとはどうなつたか知りません。

人間というものはずいぶん運命が異なるもので、私が烏蘭花にいた頃、同じように静岡から行つた兵隊で、字は知りませんがサツソ山という所にいた補充兵の中隊ですが、古兵が作戦に出ている留守に八路軍（編者注）一九三七年から四五年までの日中戦争期における中国共産軍戦争終結時は兵力六十万、戦後は中国人民解放軍と改称した）に襲われて全滅しました。

そんな具合で私は奉天の病院に入つて更に内地の小倉の病院に転送されて、そして静岡の原隊に復帰しました。ですから、他の兵隊で成績のよい人は上等兵になつていてときに私は成績がわるいものですからいつまでも二等兵で、原隊に帰つてからは丈夫になり、母が面会に来てくれましたが、あまりにも元気がよくなつていましたので最初は見分けがつかなくなつたような有様でした。

それから今度は編成替えになつて南方へ行く要員として編成されたんですが、そのときは下痢をして残されました。結

局、三回ほど編成部隊に入れられたのにその都度、何やらかやらの理由がついて残されたので、外地へ行かずにすみました。軍としてもあいそがつかたのでしよう。ある日、「おまえは除隊だ」というわけで、十九年の八月三十日に静岡の連隊で営門の所を「歩調をとれ」をやつて帰つて来ました。

その日は空は晴れて、とてもいい日で、すごく気分がよかつたことを覚えています。自宅へ帰つて、畳の上に寝たら王様になつたような気がしました。

感謝の心を起こして命拾ひ

それ以来、私は家の手伝いをやつたりぶらぶらしたりしていました。この年十一月になつて自宅の金魚池に二畝ほど蓮根が作つてあつて、その蓮根掘りをやりましたら、また体を痛めて、今度は本格的な病氣になつたのです。そして昭和二十年の二月十二日まで寝ていましたが、その月の十日頃でしたか、すぐ近くに叔母さんが住んでいましたけれども、その叔母さんが「いや、その前に、私は二階に寝ていたので、ある日母が階下でこそそ人と話をしてるのを聞いたんです。「敏夫ももうだめだな。もうあきらめるよりほかないな」

次の日でしたか、隣に住んでいた人が「敏ちゃん、体が弱いのなら、これを読んだらどうか」といつて、ある新興宗教の本を一冊持つてきてくれました。それを読んだあと、叔母さんがやつて来

て、「おまえは全然食べられないぞうだから、これでも食べたらどうか」といつてソーメンを持つて来てくれたんです。それをゆでて食べたらとてもおいしくてよく食べられたものですから、思わず起き上がった叔母さんの方にむかつて拝みました。

肋膜炎だつたのですが、自分で考えて、この病氣を治すには血をふやさなければいけない、そのためにホウレン草を食べること、そして消化をよくするために大根おろしを食べることと考えて、母親に頼んで作ってもらつたんです。そうしたら次第によくなつて、二月十三日に起き

たんです。そのとき思つたことは、畑が三畝ばかりあつて、そこに父が自家用の野菜を作つていましたから、ホウレン草も大根もありました。だから病氣が治つたらホウレン草も大根もお礼にうんと作つてやるぞと思つていましたが、人間はだめです。治つてしまつたら忘れてしまふんです。

そして二月十三日に起きました。ところが、その日に起きたからよかつたのです。二月十五日に米軍機による焼夷弾の攻撃があつて、私の町内が焼けたのです。その当時まで私は十畳の部屋に寝ていたのですが、私の首にあたる位置に焼夷弾が落ちて床に突き抜けたのです。ですから感謝の心を起こさなかつたら私は死んでいただいでしょう。

人を助けるために軍隊から帰された

その前にもつと幸運なことがありまし

た。先にお話ししたように私は徴用で愛知時計電機という会社にいたのですが、ここは艦載機を作っていましたから、ものすごい爆撃をくらったのです。それで私の親戚の人が爆撃の翌日に愛知時計電機へ行ってみたら、すごい惨状を呈していて、死体が木にぶらさがったり、あたり一面に死体ごろごろしていたというところで、私が勤務していた事務室に二十人ほどいたのですが、その全部が大怪我をするか死ぬかどちらかだったと話していました。しかし私は軍隊に入っていて、そこにいなかったばかりに助かったのです。したがって私も久保田会長と同様に、なぜか危険をのがれる不思議な運命をもつ人間だと言えます。こうした例はまだ他にもいろいろあるのですが、長くなりますから省略しましょう。

先にお話ししましたように「おまえを軍隊から帰してやる」という不思議な声が耳に聞こえてから、本当に私は除隊して帰って来たのですが、この除隊の理由についてはあとでわかってきました。

私の父が金魚の蘭鑄を飼っていたことは先に述べました。蘭鑄というのは体が丸く、背びれがなく、優美なので珍重されます。そして父は浜松の金友会という蘭鑄を飼う会の審査員をむかしやっていたのですが、偶然のことから蘭鑄のキモが肺炎の妙薬であることがわかったのです。当時はペニシリンのない頃で、肺炎になった人はほとんど死ぬような時代でした。しかし私の所で飼っている蘭鑄をわけてあげて、それを飲んだ肺炎患者は死なないのです。毎日のように蘭鑄を求め

て人が来るので、父は少しも惜しまずにわけ与えていました。私の叔父で農業をやっていた人がひどい肺炎になり、医師から見離された危篤状態のときに家族が蘭鑄を求めてきたものだから、父が特別上等な蘭鑄を二匹持つて行って、腹を割いてキモを飲ませたら、四十度五分もあつた高熱が翌日は平熱に下がって、それきり治つてしまい、医師がびっくりしたということでした。こんな例をあげれば枚挙にいとまがないほどです。

父が亡くなってからは私が蘭鑄を飼いつつて、肺炎患者にわけることをやっています。したがって、これぞいふん多くの患者が治つていきます。結局、この人助けの仕事をするために私は軍隊から帰されたのではないかと思うのです。後になってこのことに気づくようになりました。

現在には抗生物質がありますから、よほどの高齢者でない限り肺炎患者は医師の手当てを受ければ治りますが、今でも肺炎で危険だという状態になったら蘭鑄のキモを飲むとよいですね。熱が下がるまで四時間おきに飲むとよいのです。

輝く土星型円盤を目撃！

さて、いよいよ宇宙的な体験に移りましょう。一九七一年(昭和四十六年)の八月のことですが、この夏は冷夏でした。気温は毎日克明に記録してあります。

この月の十六日ですが、この日に私は円盤を目撃しました。UFOを見たのはあとにも先にもこのときだけです。そして宇宙人らしい女性が訪ねて来た

のが翌十七日と、二日おいた二十日の日です。

私には二人の息子がいますが、その当時二人とも家を出ていましたから、私と一緒に家に住んでいたのは家内だけでした。でも円盤を見たのは私だけで、家内は見えていません。

八月になってからどういわけか心が落ち着かず、そわそわしてきたのです。そして「外へ出て来い」というような声が耳許で聞こえるような感じがするので、それで家の裏へ出て空をあちこち見回しても何も見えません。こんなことが二〜三回ありましたし、裏まで行くのは面倒なので屋根の上で空を眺めたこともありましたが、星がまたたいているだけで、全然何も見えないんです。

十六日は曇り空で、雲がたれこめていました。それ以前にも大体に私はこの大きな宇宙には地球以外の星にも素晴らしい人間が存在しているのだらう、素晴らしい女性もいるのだらうと思つて、ときどき空を眺めていました。

十六日も夕方頃、そんなことを思いながら、ふと空を見上げますと、雲の裂け目に何かが見えるのです。おかしいなと思つて、錯覚かもしれないと思い、左の人差指をつねつてみたら痛いので、これは本当だと感じました。

そうこうするうちに雲が移動して青空の部分広がりました。天頂付近の西北上空です。雲の右端の方に円盤が出現して左の方向へ移動しました。夕焼けのために円盤の外壁が白銀色にキラキラ輝いて、ものすごくきれいで、見えたのは約

十二秒ぐらいでしょうか、雲の左端で真南の上空に移動し、東海道線の架線の上空で上昇して雲の中に消えました。私にはあつけにとられて見ていたので、家内に知らせる余裕もなく、あとで家内からなぜ呼んでくれなかったのかと怒られたような有様です。

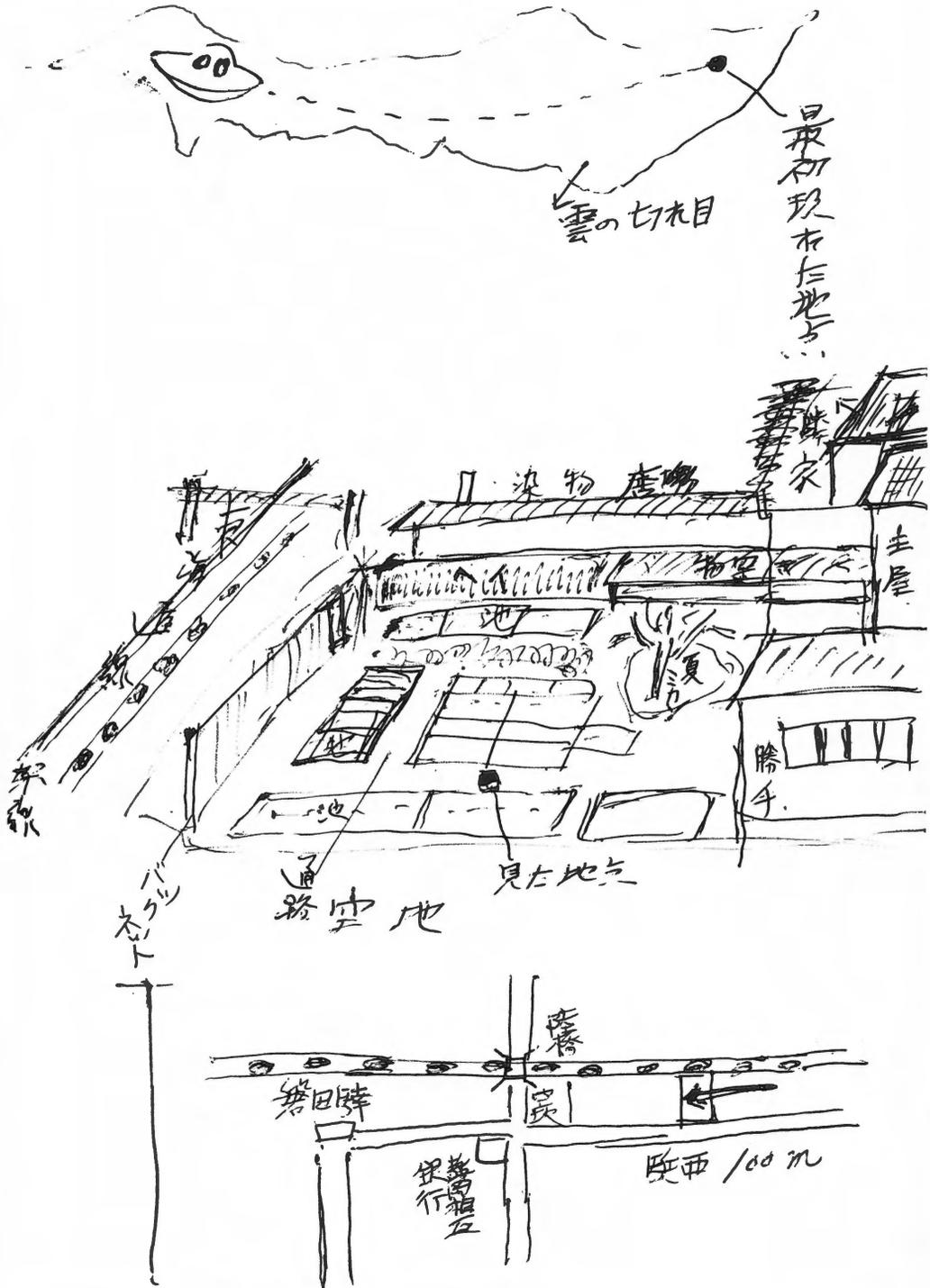
円盤の形はいわゆるアダムスキー型といわれるものとは少し違つて、土星型です。ドームには丸窓が二つありました。時刻はよくわかりませんが、もう少しすれば日が暮れるというような時間帯でした。

このことは約二年間だれにも話さなかつたのですが、その後GAP会員の鈴木謙次郎さんに話したのが最初です。

異星人の女性が来訪

その次の日の十七日のことです。その日は仕事が終わるまで、もの憂い夏の午後の二時半頃でした。金魚店の自宅の中に私がいますと、右側の出入口から戸をあけて、一人の若い女性が入って来たのです。にっこり笑つて入つて来ました。その表情は「私はあなたを昔から知っていますよ」といふような、なんとも言えない親しみの満ちたもので、奥へ歩み寄つてから、丹頂という頭だけ赤い金魚が水槽に二匹ばかり入っていたのを物珍しそうに眺めて、それから私の方へ近づいて、テレパシーで「餌が欲しい」と言うのですが、というのは全然ものを言わないのですが、どういうわけかその気持が私にわかるのです。店には「養鱗」という二十円金の

円盤出現時の見取図 (岩崎敏夫氏画)



魚の餌があるのですが、それが欲しいと言うのです。

そこで私がそれを出して、どうぞとばかり渡したのですが、相手は財布などを持っておらず、どこから出したのかはわかりませんが十円玉をパッと二つ出して、私に渡したあと、急いで出て行きました。

初めに店へ入って来るときの様子は、地面に両足がつかないような宙を飛ばすようなヒョイヒョイとした歩き方でした。

その人の身長は私の胸のあたりまでしかなく、一メートル四十センチほどでしょうが、小さい女性なのに大人という感じで、気品があり、髪は黒くて、うしろで二つに分けて長く垂らしていました。

目は白色に少し赤味がかつたような色で、西洋人のように瞳が緑色です。

その服装たるや明治時代に流行したワンピースのアップパツパに似たもので、白っぽくて、ヒダがついていました。靴下をはいていたかどうかは覚えていませんがサンダルをはいて、腰に細いベルトをしめていましたが、ポケット類は全然ありません。

顔付きは白人系統の顔ですが、ちょっと見た感じでは歌手の林寛子さんに似ていたと思います。

その女性は足早に出て行きました。終始無言のままでしたが、ずっとここにこしてました。

私はそのことはまもなく忘れてしまったのですが、中二日において二十日にまた二時半頃、その女性がやって来ました。今度は微笑を浮かべないで、まじめな顔をして入って来て、ビニールの袋に入

った魚の餌の「ペレット」という百二十グラム入り百円のを欲しいというので、それを渡しました。

すると相手は私のそばから動こうとしないのです。どうやら私を連れて行きたいような素振りです。相手は一分間ぐらいジツとしていました。私は行きたくないので心の中で拒否したところ、相手はその感じをフツと解いて出て行きました。が、なんだか憐れみの表情を浮かべていました。彼女が出口の外へ出たとたんにパツと消えたような気がしました。あるいは私の目の錯覚だったかもしれません。

この女性が奥にいたとき、家内も離れた位置からその姿を見ていて、「おかしな人だね」と言うのを私は聞いたのですが、あとで尋ねてみると、家内はそんな女性が来たことは全然知らないと言っています。だからこれは相手の女性が家内の記憶を消したのではないかと思えます。

結局、この日に不思議な女性が来たのは、私に円盤を見せるために連れて出ようとしたのかも知れません。この円盤は夜中に天竜川の河原に着陸したのではないかと思えます。

異星で姉弟であつた？

それ以来、私は彼女のことを思い浮かべながら念じていると、いろいろな印象がやって来るようになりました。あまり危機感をあおりたてるような話はいらないので省略しましょう。

それで、もう一度会って話を聞きたいというテレパシーを送るのですが、その

前に思い出したのは、最初に来た女性と二度目に来た女性とは表情が違うところから、双生児ではないかと思うのです。

最初の頃は念じていると二人の顔が浮かぶのです。それである夜念じていると、突然自分がどこかへ引き込まれて落ちて行くような気がしました。すると、ある惑星が浮かんで来て、その惑星の姿がだんだん大きくなって、そこへ着いたと思つたら、山の中腹に一軒の家があつて、そこに一本の高い木が立っているのです。その瞬間に、「これは私の家に訪ねて来た女性の家かな」と思つたとたんに目が覚めて、自分の意識にもどっていました。

これからみると過去世において、その惑星で、私とその女性とが姉弟として暮らしていたのではないかと思えます。これについてお話しすればまだ沢山の不思議な現象があるのですが、あまり荒唐無稽ウラタラシと思われるようなことは話したくないのです。

その惑星から地球へ転生してきた私は更に現在まで地球上で四回転生しているようです。それについてもいろいろと過去世の記憶があります。

子供の頃から困った事が起きた場合にそれを解決しようとして願うと、必ずそれが実現するのです。子供のときは一種センチメンタルな子供で、ときどきなげか悲しい気分におそわれたものですが、その不思議な女性に会ってから悲しい気分が全然なくなつたのです。だから不思議だなと思えます。私が過去世でその女性と暮らしていた惑星の名はわかりませんが、この太陽系であることは間違いあ

りません。

そしてこの世界でも私はその異星人の女性に守られているらしいのです。たとえば昨年は金魚界は不況でしたが、「心配は不要です。なんとかしますから」と言われていたので、売り上げは伸ばしました。これにはGAPの宇宙哲学も応用してお客さんの立場になって物を仕入れておいて適正な価格で売れば必ず売れるものだという自信を持つようになりました。機関誌「宇宙哲学とUFO」はずいぶん良い参考になりました。

異星人女性からのテレパシー

「心配は不要です。なんとかしますから」というのは例の異星人の女性から来た言葉です。私の場合には心配事を想念で相談すると、耳の所にボンボンと答が返ってくるのです。この頃はテレパシー現象があまりありませんが、二三年前はよく「お会いしたい」という想念を発したのですが、そうすると「私たちはとても忙しくて、会っている余裕はありません」という答が返ってきました。結局、よく言われているように彼ら異星人は地球のために働いているのでしょう。

巨大地震は発生しない

先程述べました「危機感をあおるようなことは言いたくない」というのは、こういうことです。つまり人間が自然を破壊してゆくことを続けるならば、それは宇宙の意識を破壊するのと同じことです

から、そうなるといつかは報復があることになりませう。そういう意味なのです。その異星人の女性がそういう意味のことを言っていました。テレパシーで——。この頃は精神が低迷したせいとか、あまりテレパシーによる連絡がありませんが、以前はずいぶんありました。いまは精神の状態が低下したので同調しないのです。

（「自然の報復」というのは大地震や天変地異を意味するのですかという編者の質問にたいして）

大地震が起こるときはあらかじめ知らせると言っていましたから、いまのところ知らせがないのを見れば、その心配はないようです。

東海大地震の可能性はまずないだろうと私はみています。震度四か五ぐらいのものはあるかもしれませんが、大破壊に通じるような地震はないでしょう。

これは私の考えですが、伊豆半島なども何万年もかかって隆起したのですから、突然海中に没するような大異変はないと思います。

関東地方の海中沈没の噂にしても、長い時代を通じて徐々に起こるかもしれません。急激に発生するとは考えられません。なにかそのような感触でした。

恐るべき体内汚染

ただ心配なのは人間の体内汚染です。これは確実にやっています。これはすごいのです。明治生まれの人は体が丈夫に出ていますが、二十歳代や三十歳代の人

たちはあと二十年ぐらいいしか寿命がないようです。体内がかなりひどくいかれていらいしいのです。私はアダムスキーの書物を読んでから体に関することをずいぶん勉強しました。それでいまの若い人は有害な物質を相当に吸収していることがわかったのです。

私の先祖が内科医だったせいとか、私を体で丈夫にする方法を研究するのが趣味でして、いろいろと調べました。

（編者注 岩崎氏は体内汚染についても異星人から情報を送られていたようですが、慎重に言葉を選びながら語るるところをみると、詳細な公開を避けているらしい）

その婦人のことですが、全く継ぎ目のない服を着た人で、その格好は「宇宙船艦ヤマト」の劇画に出てくるような姿でした。

でも、それを本当の宇宙人ではないかと思ひ始めたのはずっと後になってからです。そして耳許で声が聞かれるようなテレパシー現象が始まったのです。

人間は楽しく生きられる

人間はあらゆる可能性を持って生まれているのですから、決して失望することはないと思います。この世でだめなら来世でやればよいのです。この世でも、本当にやろうと思えば、どんな事でもやれると思います。

ですから夜空を眺めていて、何かの星にひかれる場合、その人は過去世でその星に住んでいたのかも知れません。私が住んでいたと思われる惑星で、そ

の婦人とは姉弟だったと思うのですが、私自身は地球に転生してから更に四回ほど生まれかわっているのですけれども、その女性はその惑星でずっと生き続けたのだらうと思います。私の店に見えたときはおそらく百五十歳から二百歳ぐらいたったのでしようが、見たところは十七、八歳か二十歳そこそこの若い女性でした。

その人は霊的な存在ではなくて、完全に心臓の鼓動のある肉体を持つ人間でした。私のすぐそばにいたからそのことははっきりと感じ取ることができたのです。気品のある高貴な感じのする女性ですから小さく見えなかつたのです。

私は水彩画を描くのが好きなものですが、どうしてもうまく描けませんでしたが、その高貴さがあらわせないのです。まだずいぶん不思議な話があるので、差しさわりのあるためにくわしく話せません。

私はきわめて楽天的な生き方をしています。これは異星人に守られているということよりは別に、私自身の楽しく生きる方法によるものです。心を切り替えれば人生は結構楽しいですね。

編者付記

筆者岩崎敏夫氏はきわめて謙虚な穏厚円満な方で、みかけ上は普通の老人と変わらぬ変哲のない楽しそうな雰囲気を持つ人であり、超常現象的能力を持つ人物によく見られるような異常さや常識はず

れな態度などはみじんもないきさくな方である。

しかし話しぶりは慎重そのもので、かなりのシロッキングな秘話がまだあるらしいが、立場の関係もあって詳細は省略された。当初は本誌への掲載を拒絶されたのだが、編者のたつての頼みにより応じられたのである。これは発表することによって多数の読者からの手紙や電話等による問い合わせで忙殺されることや、いやがらせの電話などを気にしておられたためであるから、氏にたいする照会は極力遠慮されるようお願いしたい。世の中には不思議なことがあるものだという感が強くなるばかりである。

なお岩崎氏のUFO目撃体験の部分のみは簡単な記事を本誌77号の「目撃レポート」に掲載したが、本号では更にくわしい内容を公開できた。氏のご好意にあつたため感謝する次第である。また仲介の労をとられた静岡支部代表・野口敏治氏にお礼を申し述べたい。





〈連載第二回〉

驚異的な超能力と高次な精神の
持主による不思議な実話は続く。

美しき惑星の思い出

中川真理子

これは最近のことですが、やはり透視の体験です。自分の部屋にいて普通の状態で目をつぶっていたんです。すると丸窓みたいなものが四つ見えて、その中に人の顔が見えました。そしてそれが次第に遠ざかって消えてゆきました。

この頃は目をつぶると何かが見えるんです。砂浜みたいな所を一生懸命に走っている男の姿を見たこともあります。これはごく最近のことですが、もしかしたら過去世の自分の姿かもしれませぬ。昔の人という感じでした。

何かの光景が見えるときはそれが静止した場面でなしに流れて動いて見えるんです。テレビカメラを移動させながら撮影すると画面が流れて見えますね。あれと同じです。人が現れてもそれが動いてるんです。

私は中学の頃からパッハのオルガン曲

がすごく好きで、いまでも毎日のように聴いています。オルガンの演奏者の手の動きが好きなんです。そのせいか、この頃透視で見えるのは、なめらかな手の動きが多いんです。あるいはスイッチを押している手とか……。とにかく手首から先がよく見えますが、私は昔から体のなかでは手が好きで、両手を見ると、すごくいい感じという感じがします。

私だけに現れるUFO

今年になってから私という人間がすごく変わってきたと前にも言いましたが、今年（五十七年）の六、七、八月頃ですが、どういうわけか毎日のように仕事から帰ると、ずっと空を見上げる習慣が身についたんです。なぜかわかりませんが……。とにかく見なくちゃいけないよう

な気がするんです。

そして円盤と思われる物体を何度か見ました。不思議なことに妹と一緒にいると見えません。そして妹に電話がかかって席をはずしたときに私だけがUFOを見たことが何回かありました。すごく不思議なんです。私だけにしか見せてくれないんです。これは前にお話したことですが、もつとくわしくお話ししましょう。

特にはつきりと見たのは、やはり妹と二人でいたときでした。一緒に話をしながら空を見ていたんです。夜でした。そしてたちょうど妹に電話がかかって席をはずしたんです。

そのとたん、真上の空にもすごく光る光体が二、三度点滅したんです。「わあ、すごい！」と思って見ていたんです。が、アパート住まいですから、前側の窓

から見ていますと、光体が裏の方へ移動すれば部屋の中を横切って裏側の戸をあけて見なければなりません。それで、「大変だ！」と大声で騒ぎながら裏の方へ走って行ったんです。

そしたら光体はやはりその方向へ移動してきているんです。そこで家の人たちみんなを呼んで「早く見な、早く見な」と言っただけですが、「なんだ、それは飛行機か星だろう」と言って円盤だということだれも信じてくれないんです。その信じてくれない人たちがペランダまで来たとなん、光体は消滅してしまいました。

私はとても残念でしたが、あれは絶対に円盤だと確信していましたから、みんながいなくなっても私だけ一人で空を見上げながら、必ずもう一度出現するよう気がするのを待っていたんです。

そしたら、やはりボカッと光体が現れたので、とても嬉しくなって双眼鏡でずっと見ていましたら、光体はゆつくりと遠くへ下降して行きました。私は最後まで見ていました。あのときはすごく嬉しかったです。(編者注)妹さんは天体観測を趣味とするが、UFOをこわがる)

奇妙な予知

つまらないことかもしれませんが、私は自宅へ帰る前に夕食のメニューを予知することがよくあります。どんな料理が待っているとか——。なにかいやしいみたいで恐縮ですけど——。

私は職場までバスで通勤していますので、仕事が終わってからバス停に立っていますと、あたかもその料理を食べたかのような感じがすることがあるんです。匂いとか味とかですね。だからきつと今日の料理はあれだなと思うと、必ずそのとおりのもが出るんです。家に帰るとすぐに「お母さん、今日の料理はこれこれでしょう？」と尋ねると、「そうだよ」と答えます。おやつなどもよくあてまします。

最近ですが、地元にある新しい店が出来ました。その開店日は全然わからなかったんですが、それは「八月四日」だということを見ました。そしたらやはり八月四日が開店日でした。

去年の夏(五十六年の夏)のことですが、妹の友達が家へ遊びに来るということを前日に妹の口からはつきり聞いたものですから、その日、仕事から帰って妹

にむかって「今日、友達が遊びに来た？」と聞いたら、妹がびくくりして「どうしてお姉さんにわかるの？」と不思議がるんです。

「あんな、昨日私にそう言ったじゃないの」と言うと、妹は「絶対に言った覚えはない」と主張します。その友達の来訪というのは、その日妹が友達と一緒に学校から帰りながら突然きめたことだから前の日に言うはずはないというわけです。でも前日に妹が「明日は友達が家に来るよ」と確かに話したんです。だから私にわかったんです。これは本当に不思議です。

ユダをいとしく思う

ところでイエスを裏切ったといわれるイスカリオテのユダのことがひどく気になるんです。

(編者注)一説によるとユダはイエスを助けようとして司祭に金を渡し、これでイエスを救ってくれと頼んだが、司祭は実行しないで逃げたために、ユダが裏切ったことにされたという。またイエスの十二弟子というのは太陽系の十二個の惑星をあらわし、裏切者ユダは太陽系連合を裏切っている地球を象徴するという説もある。この話を編者から聞いた中川さんは語り続ける)

ちよつとしたことなんですが、あるとき私は休日に服のヒモを結んでいたんです。すると突然そのヒモを見たときに涙がわいてきて、イスカリオテのユダのことを思い出したんです。その理由はわか

りませんが、なぜかユダが「いとしい」という感じが強くなって、わけもなく涙が流れるんです。哀れというか何というか、休日に服の整理をしながらヒモをリボン結びしているときにそのような強い印象が起ったんです。なぜユダの印象がわいたのでしょうか。

え？ ユダはイエスのグループの会計係だったのですか？ そうすると財布のヒモと関連があつたんじゃないかと考えたりして——(彼女はあでやかに笑う)。それ以来、ユダのことがたびたび気になって、本当に裏切つたんだろうかと、弁護したいような気持ちになっていました。

編者宅付近と室内を透視

また透視の話になりますが、先生の家はマンションの八階でした。窓から見える景色はどんな景色ですか？ あまりきれいでない民家が密集している風景だとおっしゃるんですか？ そうですね、実は先生の家の付近を透視してみようと思つて、ある日、目を閉じたら、あまり大きくない家がちやちやと密集している風景が見えたとです。そして、そのなかにひととき大きな白っぽい建物が見えましたが、そんな建物がありますか？ (注)これは江戸川区体育館であろう)

先生のお部屋には本棚がありますか？ 本などは沢山並んでいますか？ 透視してみたら本が沢山並んだ本棚と椅子というソファみたいなものが見えたとです。最初に本棚だけが見えて、その下の方に椅子が見えました。それを絵に描きます

と、こんなふうになります(彼女は大きっぱに描いたエンピツ画を見せる。椅子は大きなソファみたいな肘掛け椅子になっており、その後方に書棚がある。四帖半の事務室の光景を机の前方から透視したかたちに描いてあるが、大体的に中しっている。椅子は自宅付近のある会社の社長用の払い下げ品)

佐藤春雄氏の居所を透視する

十月頃ですが、日本GAP秋田支部代表の佐藤さんと電話でときどき話したことがありますが。それでこちらから電話をかけたら留守だったことが二、三ありました。そこで今頃佐藤さんはどこにいるかしらと思つて、何か見えないかなと思ひ、目を閉じました。すると、そのとき、まるで自分が車の助手席に乗っているかのように、景色が左右に分かれながら後方に流れてゆく光景がテレビの画面を見るように見えるんです。

あとから電話で聞いてみたら、佐藤さんはちょうどその時刻に温泉からの帰りで、車に乗っていたということでした。あの方はよく温泉に行く人なんです。

あるときは山が見えました。左手にたんぼが見えます。この景色も流れていました。それであとから電話で聞いてみたら、やはり佐藤さんが温泉から帰る道すがらの風景だということでした。

私の透視というのはアダムスキー型円盤が見えることが圧倒的に多いんです。夜間暗い室内なら目をあけていて見えるんですが、昼間の明るい所なら目をつぶ

らないと見えません。

異星人(?)の顔を描く

今年の七月十八日のことです。私はときどき趣味でパンを焼くんです。それその日もパンを焼いたんですが、酵母を発酵させますと、発酵しないで乾いた部分白い形になって残ることがあります。そのときこんなふうに残ったんです(彼女は紙に描いたスケッチを見せる)。この形は地図の上ではすぐ四国に似ています。これは面白いと思って、すぐその場でスケッチしようと思つて、紙とエンピツを取りに行つてもどつて来たたら、四国

の形をした部分の高知と愛媛のあいだのあたりがパツクリと割れていたんです。だからいつか地震か何かが起こるんじゃないかと心配でした。

十月の二十九日には朝から何か描きたくて仕方がないという感じがしていました。そして夜になって突然こんな絵を描いたんです。しかも暗い部屋だったものですが、隣室から洩れてくるかすかな光を頼りにして、シンの太いエンピツで描いたんですが、あの暗い場所でも、しかもメガネなしにどうしてこんな絵が描けたのか不思議でしょうがないんです。お見せするのは恥ずかしいですけど――、
|| 写真。



金星人オーソンの顔みたいですか？

そういえばそのようにも見えますね。この絵は自分でも見ているとすごく好きなんです。むかしから絵を描くことは好きで漫画などよく描いていました。しかし暗がりの中で、こんな絵が描けたというのは本当に不思議です。

私の場合は透視といつても他人の過去世が見えたり未来の運勢を予知したりするわけではありませんから、この記事が掲載されて私宛に問い合わせなどが殺到しても、どうしようもありません。

(ここでイエスの話になって、二千年経過したのに現代の地球人の精神レベルは二千年昔と大差はないという内容になる)

こんなことを考えるとたまらなくなります。小学校の頃から「どうして世の中はこんなひどい状態なのだろう」と、友達と涙を流しながら話し合ったこともあります。

人間で本当に不思議ですね。こんなふうに見える人間もいれば、何も考えない人もいるのですから――。

不思議な感動的な夢

また夢の話になりますが、これは十月二十五日に見た夢です。その夢の中で私は男でした。まわりには十二〜十三人の男の人がいて、だれも長いだらだらした服を着ていました。

それで、ある偉大な指導者が来るというので、みんな待っていたんです。やがて、その方が到着されて、一同にむか

つて宇宙哲学みたいなすごい話をされました。その内容は覚えていませんけれども――。

そうしたらその偉大な方が「この場所には居られなくなったから、場所を別な所に移します」とおっしゃったんです。そのときなぜか時計を見たら午後三時でした。これはよく覚えていてます。それでもみんなも一緒にぞろぞろと移動し始めました。

気がついたら、いつのまにか一同は病院の中にいるんです。病人が沢山いますが、一人のお婆さんが――やはり病人なのですが――私を引っぱつて、「あの偉大な方をここへ連れて来てくれ」と言つて私に頼みました。そのお婆さんは、「あの方の姿さえ見れば私の病気は治るんですから」と言うんです。それで私はその偉大な方を、ちよつとすみませんという感じで呼びに行つたんです。

そのときまでにかわつていたんですが、実はその偉大な方というのは久保田先生だったのです。そこでその方がお婆さんの所へ来たたら、お婆さんの病気がパツと治つてしまつたんです。そしてその偉大な方が「あなたの信じる心が自分を治したんですよ」と、あたたかくお婆さんにおっしゃいました。

このあたりからその方の顔が、久保田先生の顔から見たことのない男の顔に変わっていました。でもはじめは確かに先生の顔でした。

そのお婆さんを治してから、その方と私と二人で病院の中をぐるぐる回つて、いろんな病人を次々と治してゆきました。

そういう夢でしたが、目が覚めてからすぐ感動して、「わあ、すごい夢を見たなあ」と思ったんです。まるでイエスの奇跡と同じような光景だったものから、たいへん感動しましたし、内容もよく覚えてます。ずいぶん不思議な夢でした。

次に最近見た夢ですが、これは私自身が森のような場所で人いっぱい集めてみんなにむかって悟ちやうどしているんです。しゃべっている科か白はくもまだはつきり覚えてます。それはアダムスキーの「生命の科学」をそのままコピーしたような科白なのです。

「心と意識を一体化させなければ真の記憶は残りません。そうしないと自己の正体を見失ってしまいます。いまのあなたの生き方が、そのままあなたの来世をつくり出すのです」

こんなことを皆さんに言っているんです。これは「生命の科学」を毎日のように読んでいますから、それが言葉となつて出たのだらうと思います。これもさすが心に残っています。

日本GAPに入会してよかった

いろいろと不思議な事をむかしから体験しましたが、話す相手がいませんでしたし、忘れてしまったことも沢山あります。私が「不思議だ、不思議だ」と言っても、まわりの人が全然聴いてくれませんし、私もそんな話をするのがバカみたいになって、話さなかつたんです。

私がいよいよ日本GAPに入会しなかつた

ら、私の体験はこのまま埋もれてしまつたかもしれません。ですからGAPにめぐりあえたことにすく感動しています。

私以外にまだこんな不思議な体験をした人が沢山いるのではないかと思います。それが何を意味するかに気づかずにいると思うんです。

(編者注)以上までは前号掲載の、昨年十二月十七日、秋田市における編者との対談の続きであるが、以下はそれ以後の電話・手紙等による報告をまとめたもの)

母船内を透視？

十二月十九日の午後六時頃、目をつぶって休んでいましたらある光景が見えました。明るい近代的な部屋か廊下みたいな所で、壁面に複雑なスイッチ類などの機械装置が並んでいるのです。奥行きのある細長いような場所でした。印象としては、母船内の壁面の一部です。高貴な空気で、張りつめたようなムードがありました。

うんと良く言わせてもらうなら、もしかしたら過去世のある日、私はその光景の中において、その壁を自分の目で見ただかもしれません。そしてその記憶がよみがえつたのかもしれません。

しかし、あれこれ思いをめぐらせ過ぎますと、見えたものに対して、どうしようもなく狂おしい感情(懐かしさ、むなしさ、その他)がわき起こり、心がアンバランスになりかねませんので、あまり深く考えぬようにしています。客観視するという意味で、スクリーンの管理者

になるべきだと思うのです。

どうすれば透視やテレパシーが起ころるか

私の透視現象はどうすれば起ころのかという問題については、そうですね、それは「関心」の問題です。アダムスキー氏も著書「テレパシー」の中で言っていますが、ただ関心があればいいんです。見たい見たいと考えていますと見えません。ですからそのように騒ぎだてる心をちょっと横の方に置いてやって、そして心を静めます。これは私の場合なんです。そうしますと、想念が(心が)スト

ップしたかのような感じが起こってきます。これは全く中立の状態です。まわりのすべてが感じられなくなり、目の前に「スクリーン」だけがそこに「ある」んです。近くに人がいて何か話しているとき、その声は聞こえますし、その声に答えることもできますが、私は目の光景の中にいるんです。まるで二人の自分がいるように感じます。「見たい」という気持

は横に置くだけで、排除したわけではありませんが、そのまま心の中に居続けるのですから、ただ心を静めてやるだけでいいんです。関心というものがあるんですから、何もつけ加える必要はないんです。

テレパシー現象もときどき起こつて、相手の考えていることがわかるんですが、これもやはり関心の問題だと思えます。それを為すために自分の意見を捨てます。人と話すときに自分の「ものさし」で計りながら相手の言葉を聴くのではダメで

す。それは「審しんき」です。

言葉でうまく説明できませんが、私の場合は、相手の考えがあたかも自分の考えであるかのように、心の中に飛び込んできます。たとえば相手が恥じっているとき、そのような感情を本人は隠しているでも、私の胸の中でキュンと恥ずかしいような感じが起こり、それが「自分自身の感じ」のように思われますが、しかし相手から発せられたものであることがわかるんです。不思議ですが、なんとも言いようがありません。

ここで思い浮かぶのは、アダムスキーの「生命の科学」にありました次の言葉です(同書57頁)。

「彼らは(進化した惑星の人々は)自分によって観察される個体が、あたかも自分であるかのように、その個体について意識的になるのです」

とにかく「知ろう、知ろう、見よう、見よう」では心が騒がしくてダメです。何も考えないでいるのが一番いいんです。これはとても簡単でむずかしいことですが――。

ときどき、特に夜、フトンの中で、全く私の知らない歌が頭の中に聴こえることがあります。人の話し声なども――。でも大抵はくだらないおしゃべりや、つまらない流行歌のたぐいなので、おそらく地上から発せられる低次元の想念だろうと思えます。

このような現象は幼少の頃からありました。その頃は叱りつける声、人をバカにしたような科白、「バカノ」と叫ぶ大声などで、とてもこわくて、わけがわか

らず、一人で悩みました。これは地球上の空間に満ちている悲観的想念を感受していたのだと思います。

不気味な光景を見る

十二月二十二日の午前十一時頃、少々不気味な光景が見えました。二棟のビルがあつて、右側のビルはまともに立っているんですが、左側のビルは左方へ横倒しになっており、その手前は土砂の山になつていました。ただ目をつぶって見ましたら心が停まつた感じになつて見えたんです。これは冬の寒い季節の光景でした。未来の何かの変動を意味するのではないかということですが、さあそれはどうでしょうか。でも不気味な光景の透視はまだ他にもあるんです。

心を観察してリラックスする

この頃は自分の心の動きを観察するというおもしろい(?)レッスンを得ました。感情を極端に行使せぬというレッスンです。わき出るあらゆる感情は決して押さえつけたりするべきではなく、自然のままに放つておくのです。そうすれば自然によりき方向へと導かれてゆくのです。

心の本性にそぐわぬ行為は自分自身を生きていることにはなりません。反対に心の本性にそつた行為は気楽でたのしいものですので、心に緊張が起りません。この状態にしていますと、「気づいたら良い方向にむかつて歩きだしていた」と

いう結果になります。といひましても、これは全く私の場合なのですが――。

とにかく、いろんな場合に言えると思ひますが、感情を押さえつけてはならないと思ひます。良き方向への道は、自己の意識(自分に宿る宇宙の意識)がかならず気づかせてくれると信じていますので、何も気をもむことはしません。ありのままよいと思ひます。ただしこれは人を殺したいから殺すという意味ではありません。

万物を心から愛する

昨日(一月十九日)、一月の東京月例会での先生の「宇宙哲学」解説講義の録音テープを送つて頂きまして、聴かせていただきました。私は「宇宙哲学」はまだほんの少ししか読んでおりません。なにか表現がむつつかしそうで――。でも素晴らしい内容であることはわかります。これから先生のテープに耳を傾けつつ学んでゆこうと思ひます。

テープの裏面の「近況報告」の中で先生が私のことをおっしゃつておられるのを聴いて、私は部屋でひとりて赤面し、笑つてしまいました。先生はほめ過ぎなんです、すごく――。私は恥ずかしいです。といつても何もやましいことはありませんので、どうということはないんですが――。でも、ほめ過ぎです、やはり私はべつにどうでもよいのですが、ほかの会員の方々が期待しすぎて、あとで「なあーんだ」ということになりました。たら、その方々にすまないと思ひます。

私はただありのままを話しただけで、私の体験の話が何かの役に立つならば、私は喜んでそれを差し出すだけです。

私は何も求めませんし、期待もしません。私は自分を「神様の道具」にしたのです。この願ひは日ましに強くなります。もちろん一般的な意味での自分の楽しみはあります。でも私が嬉しいのは他人が喜ぶことです。他人が喜ぶことに役立ち得る道具になりたい。それが私の生きる目的です。でもそれは私の力量の及ぶ限りのことです。決して力むつもりはありませんので全く気楽です。

一瞬一瞬は永遠を含んでいます。いえ、この一瞬こそ永遠です。人間の一生涯など小さなものです。この永遠の時の中で、あれこれ踊つてみても何がどうなるのでしょうか。永遠のただ中にいるのだと思ふとき、とても楽しくなります。全く気楽になります。自分のありのままに生きればよいのです。多くの人はあれこれ考えすぎて結局何もつかめないのではないのでしょうか。といつて私がそうではないとも言ひ切れませんが――。

空が美しいから私は嬉しい。雲は決して止まらないから大好き。空気が「ある」から私は嬉しい。土が、砂粒が生きているからとても可愛い。立っている木々は私の同胞、私の分身。空を飛ぶ鳥は私の一部。私を迎え入れてくれる家は暖かくて優しい。生命あるものすべてが愛しい。何もかもが愛しくて仕方がありません。私の生命、心臓の音などは美しいと思ひます。万物はたしかに美と高揚の聖域へむかつて進んでいます。このような喜び

は心のあり方次第でどのようなにもなるんです。他人がこれを全く感知せずに生きていられるのは信じがたいことです。生命の美しさを見ずに生きることがあたり前な世の中が現にここにあるということも信じられせんね。

夢の中で金星へ行く

一月十四日におもしろい夢を見ました。以下はその内容です。

家の窓から空を見ていたら母船が現れて、ぐんぐん近づいて来る。手をかざしたら、手のひらより少し大きいくらいの大さきに見えるような距離になつた。気づいたら私はアダムスキー型円盤から降りたつた。まわりには三、四機のアダムスキー型円盤があつた。

私の着いた所は金星だつた。私が入つて行つた建物は木で造られた広々とした建物で、左側に大きな窓があり、そこから外が眺められた。

春のような風に吹かれて揺れている多くの木々があり、それらは生命の喜びで震えていて、愛らしかった。私は彼らとテレパシーで会話をした。楽しいフィリングに満ちつつ建物の内部を歩いて行つた。

すれちがう人々の心の中が手に取るようにわかり、調和の感じがあり、ゆったりとした、くつろいだフィリングがそこら中の大気の中にしみ渡つた。机にはある机の前で立ち止まつた。机にむかつて二人の男がすわつていた。白人タイプのハンサムな男だつた。

そのうちの一人はペンで何か書いている。その男を見たたん、「あっ、アダムスキーだ」とわかって電流が走ったようにドキッとし、懐かしくて涙が溢れ出た。

「アダムスキーは金星で生まれかわって来たのか？」

彼はとても明るく楽しそうにしていた。やドイツ人っぽい顔立ちだった。

そのままいたら、そばを一人の男が通り過ぎた。この男は強い意志、勇気という分野の発達が不十分だった。しかし非難の念のかけらもない。

このとき私は机のところにいた二人の男に言った。

「私たちに力があるとしたら、あのような人のために使うべきではありませんか？」

するとアダムスキー（？）でないほうの男が答えて言った。

「私たちが居るといふことだけで、すでに役立っているのです」

これは良い想念を大気中に放射していることを言ったのだろう。

とにかくそこではすべてがテレパシーで会話をかわすので、誤解というものは全くなく、皆、自分自身であるという感じが強くあった。

真の自由を得るには

この頃、自分の精神がすごく高揚してきて、それがずっと続いているんです。まわりのことが全然気になりません。これが真の自由だという感じなんです。物事にこだわらないから心が自由なんです。

人はみな自由になりたいと言うけれど、一方で物事にとらわれていきますね。言葉で自由と言うだけでは本当ではないと思います。心の自由が大切なんです。

勤め仕事をしていても束縛感はありません。私は勤務先のあらゆる仕事を奉仕と思っても楽しんでやっていますから、何をやっても楽しんでやっています。すけど、なんといったらよいのかなあ、すごく高揚して体が浮き上がるような感じですよ。

東京月例会で講演をやらないかというお話ですが、私にはとてもとても——。大勢の方々の前でお話することは恥ずかしく、おこがましくて、とてもできようにはありません。そういうことは全くだめなんです。

私の記事を読んでいただいて、それが読者の皆様に少しでも役に立てば、それだけで嬉しいんです。でも私にとつてはあたり前のことをありのままにお話しただけですから、そんなに価値があるとは思いませんけど——。

日本GAPは重要な活動を遂行するためにいま結集しようとしているように思われます。先生を中心として素晴らしい活動が展開するでしょう。

会員の皆様方、お幸せにお過ごし下さい。(完)

編者付記

前号から続いた不思議な女性の不思議な体験はまだあるのだが、こゝらで一応打ち切ることにしよう。プライベートな

立場にかかわるために省略した部分もある。

精神的にもずばぬけて高次なこの女性には、どうみても偉大な発達を上げた別な惑星から転生してきたとしか思えない。しかも我々のGAP活動の援助を目的として出現したらしい。たしかに前号に掲載した第一回の記事は大反響を呼び、多数の会員間に感動のあらしを巻き起こした。なかには、彼女はスペース・シスターではないかという人もあったが、地球人であることに間違いはない。

しかし同じ地球人でありながらこうまで次元の差があるのかと天を仰いで、長大息したくなるような高貴さ、純粹さ、美しさ、驚くべき超能力などの説明は困難である。昔のカトリックなら文句なしに「聖マリコ」として崇拜の対象にしたことだろう。

だが彼女は宗教とは無縁な二十三歳の快活なお嬢さんだ。一見十九歳ぐらいにしか見えぬこの「秋田おばこ」は（実際は「おばこ」というのは十七、八歳の可愛い娘さんを意味すると彼女は説明した）きれいなチャームिंगな容貌の持主である。前号10頁に掲載した写真は逆光で撮影した上、カラーを白黒に反転させたから、本人とは似ても似つかぬポートレートになってしまった。本号16頁の写真が彼女らしい顔を示している。

前号の記事の最後にも述べたように、読者が彼女宛に手紙その他で連絡することとは極力遠慮されたい。彼女は他人の過去世透視、未来の運命の予知などはいっさい行わないという。

彼女の不思議な体験については、いわゆる心靈的な要素は全くない。夢による体験が多いけれども、普通人の見る支離滅裂な夢とは異なって、すべて内容は整然としてスジが通っており、このような夢ばかりを見ること自体が謎である。

本号24頁の上段でアダムスキーが「普通の夢とトランス状態または心靈的な夢との類似性云々」と述べているのは、両者が同一というのではなく似て非なるものであることを意味している。つまり普通の睡眠時の夢と一種の失神状態または狂気の状態下の幻覚とは異なるという意味である。編者は別人による後者の例もかなり見聞したが皆不気味であった。

本人は三月末に父君の転勤により秋田市より青森県内へ移住した。そして今年七月には結婚する予定で、相手は同じくGAP会員の某氏である。宇宙的な家庭の建設とご多幸をお祈りしたい。

なお、この記事の作成にあたって、編者の秋田市への出張その他の件で彼女よりたいへんお世話になったことを特筆したい。彼女の哲学や思想は単なる概念だけではない、実際に他人を援助するための実践が伴うものであることを知って感銘を深めた次第である。

こうして人間の魂の中に「忘れ得ぬ人々」の記憶を次々と蓄積し、それを永劫に持ち運ぶことが宇宙的な成長への重要な要素の一つになるであろう。

高貴な素晴らしい人々との出会いと大いなる影響とを求めて今後この世界を彷徨し、さまざまな活動を続けてゆくことにしたい。

「空飛ぶ円盤の真相」改題・改訳

〈連載第9回〉さらば空飛ぶ円盤 11章

形而上学 心霊学 宗教

自分自身やこの世界での生きる目的、または他の惑星から来る人々に関する真実な知識情報などをいつそうよす理解しようとする人々の心の中には、こんなに非常に混乱が存在しているので、現在一般に誤用されている少数の語句の定義を述べておくのもいいだろう。

これらの語句は異星人問題に関して用いられるようになった言葉だが、現在用いられている意味からすれば、それらは全然無用な語である。

以下に述べられた各定義を注意深く研究されるならば、もともと根本的には各語が現象の形あるものの背後にある真因の理解を求めることを意味するものであることが読者にはすぐわかるだろう。

■ **psyche** (靈魂、精神) または、**psychic** (心の、靈魂の) という語は、人間の心または魂に関する語で、この場合の心とは混乱や分裂に満ちた感覚器官の心である。**psychic** は催眠術やオカルティズム(神秘学)などのような、ある異常な、曖昧な精神的現象を意味する。

■ **occult** (秘学、神秘学) は、理解の目から隠された物事を意味するために用いられる語である。物質の「神秘的な」性質というふうに、謎めいた、目に見えない、秘密の、探知できない物事である中世の神秘科学(オカルトサイエンス)というものは、現在のいわゆる物理的、自然的な科学、すなわち化学、物理、天文学などであった。

■ **occultism** (神秘学) は、これ自体は神秘的な物事の調査である。すなわち東洋で行われた神智学(スピリチュアリズム)の一体系に与えられた名称である。この道の熟練者は、全く

自然な手段によって、表面上では奇跡的な結果を生み出すことができると言っている。

■ **theosophy** (神智学) とは、神に関する知恵を学ぶことであり、これは神の心の性質と目的にたいする洞察力、または神の事象にたいする知識を求めることであった。特にそれは、神秘的な物事に関する知識は、恍惚状態、直感、または特別な啓示などによって得られるという考え方にもとづいた一種の宗教であった。

■ **philosophy** (哲学) はこんなに理解されているように、究極の原因(複数)によって宇宙のあらゆる現象の説明をしようとする宇宙的な(普遍的な)科学と定義してよいだろう。それが何かの特殊な分野の知識に应用される場合、その問題(特殊な分野の知識)に関連した付随的な現象または事実のすべてを含む、一般的な法則(複数)または原理(複数)などの集合を意味する。

■ **metaphysics** (形而上学) という語については大きな混乱が存在している。現代のいわゆる(西洋の)精神治療家は全然形而上学を応用していない。彼らは実際には本当の形而上学的概念のいずれにも全く関係のない似非宗教的概念をでっちあげてきたのである。形而上学はあらゆる現象の説明の背後にひそむ究極の原理に関する科学であり、大体においてそれは哲学である。心の哲学である **psychology** (心理学) すなわち精神的現象に関する科学は、形而上学の一分派である。

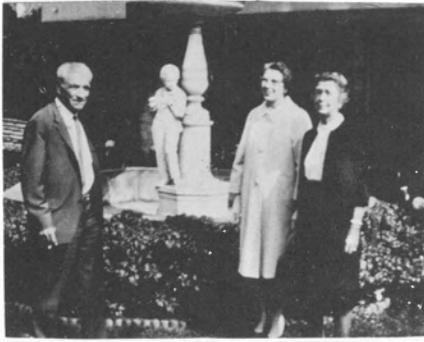
問題をちよつと考えてみれば、以上に

述べた真の意味に比較してみると、現代の心霊学は秘学や形而上学の真の科学の曲解以外の何物でもないことがすぐわかるだろう。

ある原型がくり返される

人間は一夜でこれらの科学に関する理解を得ることはできない。このような知識を得るためには生涯の探求と生活を必要とする。真の研究者は決して名声を求めることなく静かに生活し、学んでいく物事を研究し、応用する。このような研究者は目に見えない原因と目に見える物質的形態とのあいだの分離を決して認めようとはしない。また、このどちらも「互いに相手がいなくても存在し得る」ということも認めない。外形上の融合が全体を可能にするということを認めるのである。

このようにして学ぶまじめな探求者は、



▲アダムスキーとアリス・ウェルズ（右端）。

ついに明確な出来事になる原型を観察することが、ときとして可能になる。世界のあらゆる出来事の歴史を通じて、ある種の原型が何度もくり返されている。これを研究する人は、他の諸条件の介入がなければ時が過ぎるにつれてこの原型がふたたび現れることに気づく。

人間と自然の両方について何かの予言し得ないものが存在するために、未来にたいする正確な予言はできないのである。特にある原型が完全に実現するかどうかに関して、その日時と場所についてはなおさら予言はできないのだ。

以上の理由で賢明な人は「事件が発生するぞ」といった恐ろしい警告は決してしないし、「ある時期に予測不可能な事が起こって、物事の成り行きを変えるかもしれない」という、はっきりした約束などもしないのである。

異星人に関する二七予言

そこで、予言力と予言するための理解力とを一夜で得たと称して、個人的な約束をしている現代の多数の心霊的な人々と、異星人と交信していると称している人々をくらべていただきたい。肉体的なコンタクトだろうが心霊的なコンタクトだろうが、おかまいなしだ。大抵の場合、彼らの情報はウイジャボード（心霊通信用の文字板）、自動書記、トランス（失神状態）、または自分の心の中に「語りかける」目に見えぬ人などを通じて受信されるのだ。

このような方法によって、「地球と地

球人をコントロールする計画をもって、宇宙人が大量に着陸する」という約束がこれまでしばしば行われてきた。「これが実現したときには私が選ばれて世界の支配者になる」と公言した人もある。これは大ウソだ！

友星人はだれにたいしても拘束しようとはしない。私の知る限りでは、彼らの唯一の代理人として働くように任命された地球人は一人もいない。たしかに多くの人ですすんで奉仕をしたけれども、だれ一人として他のすべての人の上位に指名された者はいないのである。

ヨーロッパでは二人の「アシュター」に関する報告を受け取った。

（訳注）アシュターとは、ある自称コンタクトマンたちによって異星人の大将といわれた架空の人物）

この二つのアシュターは性質が完全に異なるけれども、どちらも多数の宇宙人の最高司令官だという。

こんないかがわしい者から個人的なコンタクト（会見）の約束や、ときには日時と場所について特定の日付や指示事項などさえ出されているのだ。こんな約束が実現したという話を私はまだ聞いたことがない。多くの人は宇宙船に乗せてやると約束されながら、それが実現しなかつたときに無残にも幻滅を感じているのである。

また、大変動が発生するという警告もあって、「精神波動を高めた」人々を乗せて救ってやるという約束もあるが、これも同じ部類に属するものだ。これらはこんにち、いかにも宇宙人から出たと伝

えられて無差別に流されている多数のメッセージなるものの少数例にすぎない。こんな大ウソは、他の惑星から来た人々と関係のある地球では無用だ！

それどころか、他の惑星から来た各連絡チームは、選ばれた少数の人を救うために地球へ来ているのではないのだ。彼らは、地球人が宇宙にたいする実際的、科学的、哲学的知識において発達するのを援助するために来ているのである。これは、地球上の宿願であった平和を確立しようという目的と万人にたいする善意とをもつ人で、人間のあいだの友好関係に本当の関心をもつ地球人なら、だれでも容易にその知識が吸収できるのである。この関係は、この地球が太陽系内での当然な平和を取り返し得る前に達成されねばならない。

この数年間に右のような誤った噂や情報が出たにふえてきたので、考え深い大衆はそっぽを向き、ときにはイヤになり、異星人の存在を否定するようになり、特にいづれの個人的コンタクトの正当性をも簡単に否定するようになって、それらすべてを等しく価値のないものとしてしまった。

今は少しずつながらも、現在発達しつつある科学上の出来事によって、思索家たちはもはや否定できない物事の論理的な説明を求めている。しかし彼らは空想やサギなどを求めてはいないので！

心霊的な通信は本物ではない

ここで私が言いたいのは、トランス、

ウイジャボード、自動書記などの方法によつて、さまざまな型の「メッセージ」を受け取っている多くの人は、自分の体験が真実なもので、自分の心の外から来たものだと言信しているらしいということがある。

だが実際には、このような体験は潜在意識によつて生み出されるもので、それは、眠っているあいだに人間の姿を見たり声を聴いたり、知的な会話を交わしたり、ときには、目覚めているときには絶対にやれないような素晴らしい離れ業を演じたりすることのできる「夢」に比較できるものである。

人間の心は複雑な自然の電子機械であつて、自己誘導のトランス状態は潜在意識にたいする開いた入口になる。この半催眠状態において潜在意識が哲学的な人生観、UFO、世界的事件などの謎にたいして深い観察をし始めると思われるのである。

このいわゆるメッセージの受信者が目覚めたとき、本人は、外部で起こった働きが、受信された情報の源泉だと確信する。本人は普通の夢と、トランス状態または心霊的な夢との類似性に気がつかないのだ。

真実のテレパシーとは

人々が日常の雑用を行っているとき、心を通過する手あたりしだいの想念の多くは、もし注意深く取り上げて評価されるならば、宇宙の知識の貯蔵庫から直接に価値ある情報をもたらすことがある。

このような想念は本質的に真実のテレパシーなのであつて、本当の知的な発達のために必要な体験と知識をつくりあげるのに有用である。それは靈魂や、この世界、またはこの世界の外部などから来るのではないのだ。

宇宙的な性質をもつこのような想念に正しく同調できるほどの能力を個人が発達させたとき、本人は破壊的な目的よりもむしろ建設的な目的に向かう径路になるだろう。分裂や個人的な野心の想念は消え去るだろう。深遠な哲学的性質を帯びた、長い時代の宿題となつていた、もろもろの疑問の背後にひそむ解答を見始めるだろう。

その人は自然の各種の力を動力に利用することができるようになり、全宇宙が開いて、しだいに宇宙みずからをその人に洩らすだろう。この方向における研究は、個人がそれをどのような名称のもとに分類しようとも、真に科学的なものである。

過去四分の一世紀のあいだ、この世界の人々は目覚めてきて、かつてないほどに良き理解を求めたがっている。異星人から送られたと称してこんにち流されている心霊的なメッセージの誤りをすぐ見分けて、知恵を求めて他の方面を探求する人もある。また二セ指導者からエゴと与えられた喜びで宇頂点になつて、しばらくのあいだ停滯して遊んでいる人もある。しかし永遠はあくまでも永遠であるので、この子供たちはいつかは遊びに飽きて、ふたたび知恵と理解を求めようになる。

テレパシーはあらゆる人に生来そなわっている能力なのだが、しかしこの通信法によつて正確に受信したり理解することが可能なほどに、自分の心の働きを充分に知っている人がどこにいるだろう。たしかに、こんにちこの世界の多数の人がこの科学を研究しているけれども、私をも加えて、それをマスターした人はほとんどいないのだ。

異星人は送信と受信の両方においてテレパシーの達人である。われわれのだけれどもが自分に聴きとれる物事を自分の好みに応じて解釈したがることは、親しい友人間でも、そして誤解の意図はなくとも、ほとんどの地球人の特長であることを異星人は知っている。それがくり返されると、聴き手の解釈に沿つた情報が与えられることになり、しかもときには元の意味とは全く異なるものになつたりして、こうしてたび重なる誤解と混乱を生じるのである。

しかも地球上の多種類の言語には、同じ語で意味の異なるものがある。これは一語だけのことではなく、同じ語でありながら国家間で全く異なる意味に翻訳されることがよくある。

たとえばアメリカでは Radiogram とという語は無線電報を意味するが、オーストラリアではいわゆる蓄音器、つまりレコード演奏器を意味する。まだ多くのこのような相違例があつて、これは旅行するかまたは一カ国語以上の言語を研究すればわかることだ。

テレパシーを開発するには

われわれはテレパシーを正しく身につける前に、まず「心」を充分に理解することが重要である。というわけは、想念のすぐれた受信者になるためには、個性を完全に排除することができねばならないからだ。

人間の心は、やつて来るあらゆる印象がしみ込んでゆくスポンジみたいなものである。その心がいつも習慣的に自分の個人的興味にとらわれているならば、発信者がだれであろうと、正確にメッセージを受信することは不可能である。受信しようとするのならば、個人的な興味の手を完全に排除することが必要である。いいかえれば「話し中」であつてはいけないのだ。

たとえば二人の人が電話で話し合つているとして、一人がのべつまくなしにしゃべり続けると本人は相手と言おうとして、こうしてたび重なる誤解と混乱を生じるのである。

一般的な地球人の心は全くこの「のべつまくなしのしゃべり手」のようなものである。心が何事かを、またはだれかの話を聴きとれるほどに静まることはほとんどない。表面上聴きとれる状態にあるときでも、後になつて尋ねるための質問を作っているか、または聴くのを中止して、いま聴いたばかりの内容についてあれこれ考えようとし、こうして、続けられる相手の話の内容を聴きとれるがしてしまふのだ。

もう一度説明すると、現在、異星人と「精神的に」コンタクトしていると称する人々のほとんどは、外出してからだれもない静かな家に帰つて来た主婦にたとえてよい。

彼女はさびしさをまぎらすために、特定の番組を選ばずにラジオかテレビのスイッチを入れる。さびしさをまぎらすのだから家の中に人間の声が響いておりさえすればよいのだ。

宇宙空間ばかりでなく各惑星の周囲にある大気は想念波動に満ちていて、その波動は過去や現在のもあり、またいろいろの特長をもっている。だから理解力もなく「メッセージ」を求めて自分の心を開放する人は、性質のいかんにかかわらず通過する想念のいずれにたいしても絶好の受信者になる。だからこそ多数の恐ろしいメッセージやウソの約束などが受信されるのだ。

このメッセージ類はかつて人類がなんらかの奴隷の状態になりすぎた頃の歴史上の事件のくり返しにすぎないのであって、そのために知恵と人間同士の尊敬とによって確立され得る平和、幸福、真の自由という生得の権利を失ったのである。

異星人は地球人のこのような状態のすべてを知っている。彼らはそれを非難しない。なぜなら、そのような状態は不愉快な体験であるにしても生長の一過程であることを彼らは理解しているからだ。このような体験（二七のテレパシー）を形成する構成要素は真の理解の前では勝ち目はないということも異星人は知っている。地球人に知識情報を伝えるのに彼らがこれまでテレパシーを用いなかったのは以上の理由によるのである。

私の場合がそうであったように、異星人との個人的会見は、ある程度の「テレ

パシー」でもって行われる。これは彼らが授けようとする知識が正しく相手に伝えられているかどうかを思慮深くたしかめるためである。それでさえも知識を授けられた人のちよつとした曲解から、彼の言葉についての誤った解釈や不正確な説明が行われてきた。他人の自称テレパシーは必ずしもあてにはならないのだ。

異星人は神様ではない

地球の兄弟たちを援助しようとして異星人たちが直面した別な問題は、異星人の来訪を宗教化させている人たちの問題である。宇宙人の名のもとに多くの宗教団体が濫立しているけれども、宇宙の兄弟たちはこれを全く喜んではいない。

異星人は超人ではないのだ。彼らは神ではないので礼拝されることを望んではいないのである。

彼らにとつての「宗教」とは「至上なる英知」だけによつて絶えず与えられる新しい想念と理解とをもつて、大自然によつて教えられながら生かされる生命の科学なのだ。地球人が宗教問題を自分で考えようとはほとんどしないで、福音の真理として他人から伝えられた宗教的解釈を受け入れるようにどの程度教えられてきたかに彼らは気づかなかつた。

ブラザーズ（友星人）は地球のわれわれのように宗教的戒律や礼拝の儀式などを持つてはいないけれども、彼らはわれわれの習慣を非難しない。あらゆる信仰は一個の知恵の真珠にもとづいていることを彼らは知っている。宗教上の分裂と

いうものは、もつぱら着古した儀式用のマントによつて生み出されたにすぎない。根本的にはみな同じなのだ。

人間にとつて知っておくのがよいと考えられた物事の解釈やその個人的な選択上の誤りをおかしながら、しかも数世紀を通じて伝えられてきた宇宙的な知恵の解釈を信仰の上だけで受け入れて、自分の考え方を他人に押しつけたたりしている限り、地球人は宇宙の法則または宇宙の創造主の生きた知識を決して得ることはないだろう。

人間は宇宙の知識を得るためには何事をもあきらめる必要はないし、宗教的信仰を変える必要もない。人間はただ自分で考えさえすればよいのだ。自分の考え方を自分自身の中へ閉じ込めたり、他人に自分の思想を非難させたりしないで、自分の思考を天地万物の中へ没入させるのだ。だれもが自分自身の再建の仕事をやらねばならないのだ。エマソンは次のように言っている。

「勞せずして金を得ようとするのは宇宙の法則に反している。他人に奉仕することが奉仕なのである」

このことを理解するならば、異星人が彼らの名のもとに作られた宗教団体のいづれをも望まない理由が明らかになつてくる。異星人とその来訪について宗教団体を作つたりする人は、彼ら自身の特別な恩恵にあずかるうとして、人類を無知な状態にしていた各種の宗派に協力し活動してきたのであり、現在もそうしているのである。

またなかにはきつと「サイレンス・グ

ループ」（訳注Ⅱ正しいコンタクトマンを否定して、妨害し、抹殺しようとして暗躍する秘密の団体）から金をもらつているものもあるだろう。このサイレンス・グループの最大の眼目とするところは大衆をあざむいて自分で考えさせないようにし、無知の状態にさせておくことにあるのだ。

その目的が何であつても、まじめな探求者の道に混乱をひろげており、同時に、あくまでも自分で考えようとする人の持つている計画のすべてに嘲笑が投げかけられるのである。自分で考える人は、何か合理的なものが事態にかかわつてくるまでは、他人から聞かされる物事のすべてを信じようとはしない。このようにしてその人は確固たる基礎を持つて確信を打ち立てることができるとのだ。

われわれと同じ普通の人間である別な惑星の友は、結果的には混乱をひき起こすこのような虚偽が彼らの地球への来訪を利用してでつちあげられたり続けられたりするのを黙視できなかつたのである。地球人の心にひそむこの問題を私が明らかにすることが最重要だと彼らは語つてくれた。世界講演旅行がとりきめられたのは以上の目的のためである。回顧してみると、この計画のための基礎は数年前に始まつていたと思う。

一九五五年の「宇宙からの訪問者」の出版によつて行われるようになった文通とともに最初から旅行計画はたてられたのだ。その年、世界各国のある人々が右の著書に感銘を受けたあまり、私に手紙をよこしたのである。（第一部完）

テレパシー開発法

ジョージ・アダムスキー

久保田八郎訳

人間を含むあらゆる生物は共通の宇宙語で語り合う。この宇宙語こそ万物を生かす宇宙力そのものであり、人間が自己のマインド(心)をこの宇宙力と一体化させるとき、真のテレパシー能力が発現する。

この講座は1958年にアメリカで刊行された不朽の名著の邦訳書としてすでに20年間愛読され、わが国で「テレパシー」という語の流行源ともなったが、今回アダムスキー全集刊行を機に徹底的に全面改訳して決定版とした。この講座により多数の読者に宇宙的なテレパシー能力が発現すれば幸いである。

はじめに

テレパシーはあらゆる生きものに本来そなわっている自然の能力であって、これにより自分のフィーリング(心で感じていること)を他のすべての生きものに伝えることができます。

自然界はまちがいがなくこの法則に従っており、一つの統一された全体として現象界を実現させるために、万物は自身自身を惜しみなく与えています。

人間とは活動する想念体です。しかし理解力の乏しさから、さまざまのゆがみを引き起こし、そのために現在いたる所に見られるような大混乱が生ずるようになります。人間は働くための道具をいろいろ持っていますが、無我の自己表現というもつと大きな分野で人間に奉仕する力を持つという自覚は失ってしまいました。

〈第1部〉

第1章 テレパシーすなわち宇宙語

「科学する心」と銘打たれた書棚には、知られてはいるものいまだに解決を見ない無数の生命の謎に関する書物が、秩序正しく分類されて整然と並んでいます。ときどき探求心のさかんな人がホコリにまみれた古記録のなかの一卷を取り出して仲間の注意をうながすだけです。

現象の背後に宇宙の英知が

人間が自分の想念を低次元段階から高次元表現に発達させ拡張する能力は、円、三角形、四角形の紙がおさめてある万華鏡にたとえてよいでしょう。回転するとに新しい模様が展開します。同じ模様は二度と現れません。人間も大宇宙と一体であるという自覚を広げるならば、万華鏡の場合と同じ変化の法則が、絶えず変転して生長してやまない模様を描き出して、充実した生命を人間に与えるでしょう。

この目的を達成するには、肉体の触感神経の反応にすぎないけれども、心で起こすフィーリング(感じ)は警戒しようとする状態であるということを理解する必要があります。

真の警戒の状態とは意識的意識(自分の意識を大宇宙の意識と一体化させた状態)であって、これこそすべてを包含する「宇宙的な知識」です。

人間の行動を支配するパワー(力)、つまり「理性の神」は、熱心な探究者にたいしてしばしば寛大であり、人間に特別なヒントを与えては謎の解明を目指す人々を力づけてくれることがあります。人間の理性のはるか上位にあるこのパワーは、ときおり個人の意識になにかの真実を印象づけて、よりいっそうの探究にかりたりします。

こうして人間は知識を積み重ね、一歩

ごとにより、高度なものに近づいてゆきませんが、謎が完全に解明されることはありません。あらゆる分野の現象の背後にはすべて「宇宙の英知」がひそんでいるからで、しかもそれを完全に理解する力は人間に与えられていないのです。

数千年ものあいだ、人間の精神の問題を扱ったその謎の書棚に埋もれて朽ちかかっていた書物の一冊に読みとれる文字、それは「テレパシー」です。

テレパシーとは何か

現代文明のさなかに生きる人でも、未来の出来事の映像を感知したり、遠い場所で発生する事件の印象を得たりするような、ある種の人々にそなわっているこの能力には、いつも驚異の念を起こします。

しかしこの謎も一八八五年までは科学的な研究の対象としてとりあげられませんでした。この年にP.R.S. (物理学会) はこの分野の権威者マイヤーズ氏の名でもって次のような声明を発表しました。「既知の感覚器官の正常な働きによらないで遠隔地の出来事を感知するような事例はすべてこれを「テレパシー」と呼ぶことにする」

だが少しのあいだは関心の高まったこの問題も、ついには未解決の分野に入れられてしまいました。

しかし第一次大戦の終結後、十年を経て初めて数カ所の一流大学の研究所が、科学的研究の価値あるものとしてテレパシーを重視するようになりました。そし

て古代には魔法が妖術と考えられたテレパシーも、諸大学で行った実験の結果、研究にあたいする明確な事実であることが決定的に立証されてきたのです。

ただP.R.S.の最初の声明も科学界がこんにちもがいている危険な障害になつてきました。というわけは、テレパシーは既知の感覚器官の「正常な働き」とは別物だという仮説にもとづいて研究をすすめるうちに、テレパシーなるものを實際的な分析よりもむしろ神秘的な仮定の分野に入れることになつたからです。

その結果、テレパシー研究は、最初の動機はよかつたけれども価値のないものだということになつてしまいました。いまこそテレパシー研究を周囲の混乱から救い出し、「宇宙のどこでも通用する言語」として真の基礎の上にもう一度お返ししてやらねばなりません。

テレパシーは本当の万国共通語

近年は民族や国家相互間についてそのよき理解ともつと永続する関係を望む気運が一段と高まっています。ラジオ、テレビ、無電などの発達により、世界を結びつけようとする動きが大きくなつてきました。当然のことながら、このために万国共通語を発達させる可能性が学者間でいろいろ論議されるようになりました。共通語があれば諸国民の交流はもっと容易になるからです。エスペラント語またはロー語など、いわゆる共通語は二、三考案されていますが、全人類が等しく認める言語システムはまだ発達していません。

ん。

われわれは言語というものを、文字または音声というかたちで描き出す絵画のようなものだと大体に考えています。したがって知識を交流するための満足のゆく方法を求めるにあつては、当然これまでに親しんできた表現法に目を向けていました。しかし音声や文字に頼つていたのでは、人間はきわめて狭い範囲の分野しか扱えないのです。

万国共通語というアイデアを最初に考へつた人たちは、自分たちのインスピレーションを大自然から得たということを知れば驚くかもしれません。この事実に気づいている人はほとんどいませんが、宇宙そのものと同じほどに遠い昔から一つの共通語は存在していたのです。これこそ人間だけでなく生きものすべての表現手段を包含し、しかも生まれたばかりの子供にも理解できる、きわめて簡単な言語なのです。

このように容易に感受され、理解でき、しかもたやすく意味が読みとれる通信方法とは何でしょうか？

真の共通語はただ一つ存在します。それは「宇宙の力」として万象をつらぬいて流れている、目に見えない、創造的な感覚インパルス(感覚を起こさせる衝動または刺激)である「宇宙の英知」そのものです。この「宇宙の因」すなわち「宇宙の力」は常に活動しています。それは必然的に一物体から他の物体に作用し、それ自体を伝達しているにちがひありません。

したがって、われわれがメンタル・テ

レパシー(精神感應)と呼んできたこの感覚インパルスこそ、偉大な宇宙語(万国共通語)なのです。

この宇宙語が全人類に理解されるとき、民族や主義という人間の作り出した障壁はくずれるでしょう。うぬぼれ、欺まん、虚栄は宇宙語の前で消え去り、その普遍性によって人間と人間、人間と大自然は調和するでしょう。この宇宙語こそ宇宙のあらゆる原子が語りあい、理解できる一つの言語であるからです。

人間の意識的な想念というものは意識のあらゆる状態で知られています。やさしい囁きも、芝居がかつた声による話しぶりも、文字の綾による巧妙なごまかしも、本人の想念の性質や意味を隠すことはできません。宇宙的な想念は真理そのものであつて、それをゆがめることは不可能です。それは活動の法則であり、いかなる物がその法則の接点になろうとも、公平に作用と反作用とを生じさせるにちがひなく、またそのようにやっているのである。

テレパシーは宇宙の法則

金星から来た観測機(円盤)の乗員、すなわち別な惑星から来た訪問者と初めて会見したときに、私は意志伝達の手段としてテレパシーを用いました。

(訳注) 詳細は文久書林刊(アダムスキ全集) 第一巻「宇宙からの訪問者」の第一部に掲載されている)

それは自然界の一つの法則、すなわち宇宙の諸法則の一つです。

この想念伝達法には神秘的なものや不可知なものはありません。なぜなら人間はテレビシーによって日々の生活を送っているからです。

いかなる想念もまず心の中で組み立てられないことには口に出して表現することはできません。このことは一般の人が自動的に行っているのですが、通常、人間は次の事実によく気づいていません。

人間の心は

(1)肉体の外界にたいするあらゆる運動を指示する。

(2)音声による表現を与える前に、まず自分の想念の組み立てと整理を行う。

(3)外界からも絶えず想念印象の流れを感じている。

精神の未発達な人はこの印象の流れから、自分の心がすでに作りあげていた意見に合致する想念だけは取り入れますが、類似しない想念は拒絶してしまいます。だからこそ人間は自分自身を理解するまでは、結果の世界（現象界）だけによって導かれるのです。

次のように言われてきました。

「自然人（自然と調和した人）には聖靈の道がわかるけれども、自然と調和しない者にはわからない」

これは、ひとたび人間が「宇宙の因」と一体であることを悟り、その法則を応用し始めるならば、もはやそれ以上の指導者は必要でなくなるという意味です。なぜなら「宇宙の法則」が人間に生命を与えたのであり、その法則が人間の指導者となるからです。毎日使用しているにもかかわらず、われわれはその存在に気

づいていませんが、その偉大な宇宙語はどろく雷鳴の中からもわれわれに語りかけるし、万象の最も深い休息の静寂の中からもわれわれに親しく話しかけているのです。

人間は本来完全なるもの

性格は人によって異なりますから、だれにもあてはまるようなはつきりした規準を設けることはできません。ここでは法則を提示できるだけです。これは各人の理解力や実行の程度に応じて有効となるでしょう。理解力や実行法も人によって相違があるでしょうが、ここに述べた原理はすべての人に等しく応用できるものです。

このレッスンがあなたにとって多少とも有益だとお考えになったら、自分で実行し始めて下さい。

必要なのは、自分の肉体の各部をよく知って、各部分がなぜそのような働きをしているのか、自分の思考をコントロールしているのは何か、内部の自我と周囲の世界とのあいだになぜこのような摩擦があるのか、などを知らねばなりません。充実した生命の表現者になるには、まず自分の感情の反応を理解する必要があります。

常に留意しなければならぬ、きわめて重要な真理があります。それは「宇宙には始めもなく終わりもない。宇宙は過去、現在、未来にわたって存在するすべてであり、永久の運動である」ということです。

人間は万象のなかで完全な表現物であるように創造されました。そして現象の世界のあらゆる面を理解できるかもしれないと考え能力を与えられました。人間は最低のものから最高のものに至るあらゆる段階の宇宙的な表現を理解することが本来できるのです。

しかし無知のために人間はこの神からの贈り物を悪用し、いまや自分の周囲に見えるものを裁き、非難しています。気づく気づかないかかわらず、裁くことによって自分を創造主よりも高い地位において、そのために自分と「あらゆる生命の与え手（創造主）」との分離感を持つに至りました。

しかし人間は自分の肉体の心が作り上げた足かせをはずすならば、「知る者」となり、そのとき万物の背後にある「宇宙の因」と一体になるのです。万象は、それを生み出した「至上なる英知（創造主）」と調和して働いていますが、人間だけは孤立し、法則の曲解者になっています。

宇宙人と地球人との大差

地球人は「宇宙人（他の惑星で高度な発達をとげた人類）」と融合する必要があることを私はここに力説しましょう。

そのどちらにもテレパシクな感受力があります。しかし印象を受感する場合、理解力のとぼしい人類と宇宙人との差を忘れてはなりません。理解のとぼしい地球人が発する想念は不公平、分裂、非難、個人的な感情などを含んでいます。一

方、「宇宙の因」から万象に及んでいる宇宙人の放つ印象は理解と同情とを伝えるのであって、非難を含んでいません。これこそ「真理」の発現です。そして「真理」の面前で疑惑はあり得ないのです。テレビシーの研究はあなたが持つ矛盾したりすることは全然ありません。テレビシーは宗教ではなくて「宇宙の法則」の一つであるからです。この法則を知れば、あなたは自分自身を大きく理解できるようになりますし、あなたの住んでいる宇宙とあなたとの関係もよくわかるようになるでしょう。

われわれよりもはるかに高度な発達をとげている異星人は、いかなる生命体もその自由な状態において、どんな活動もすべて喜びに溢れた自由に行われるものであることを学びとっています。彼らは日常の雑用をわずらわしいと考えることはなく、むしろそれを、より多くの奉仕を「宇宙の因」に捧げるための特権とみなして、雑用を通じてその特権を表現せしめているのです。

彼らは幼時から肉体の適当な保護と心の用い方を教えられています。不調和の念をいだくことはありません。そのような念が肉体の化学作用にどんな影響をおよぼすかを知っているからです。彼らの感覚器官の心（肉体の心）は、「宇宙の感覚、すなわち宇宙の因の心」と等しいまでに高められています。したがって彼らの肉細胞のすべては感覚器官の心（肉体の心）によって与えられた命令に応じるのです。

この法則を応用することによって彼らの肉体は年齢に関係なしにいつまでも健康で若さを保つのです。

(訳注)偉大な進歩をとげた異星人は、数百歳でありながら二十歳にしか見えないとアダムスキーは「宇宙からの訪問者」でこの点を詳細に伝えている)

彼らは、あらゆる生命は絶えまなく活動するのであり、創造物のあらゆる分子が「宇宙の因」の自由無碍な発現をしなから自分の義務を遂行していることを知っています。

私たちが日常生活において、これと同じような喜ばしい、ゆつたりした心の状態になるからです。

第2章 人間の四つの感覚器官

想念伝達法についてくわしく知らせてくれという手紙が全世界から私宛に殺到しました。これらの手紙のほとんどは次のような質問を述べたものでした。

「テレパシーとは何か？」

「それはどんなふうに作用するのか？」

「この想念伝達法を私も応用できるか？」

他のテレパシー術者がどんな方法で理解したのか私は知りません。私が言えるのは、私自身の方法をどのようにして習得したかということだけです。

ずっと昔、まだ若かった頃、私はまずこの問題に興味をもつようになり、ある人々がテレパシーにより通信できることを私は知っていました。私が知りたくてたまらなかつたのは、いかなる方法によってテレパシーが行われるのかということでした。それで研究を始めたので

態を保つことができるなら、私たちの意識も宇宙的な価値のある印象が自然にやってくる位置にまで高められるのです。

これは人間がその場合に周囲の世界を無視するようになるという意味ではありません。なぜなら人間は人類という全体を構成する一単位として「生きる」ためにこの地球に生まれたのであって、しかもこの役目を放棄する権利を持たないからです。真の理解すなわち進化は同胞にたいする関心と呼び起こすでしょう。そのとき万物と兄弟であることを自覚するようになるからです。

す。

当時私は「人間は五感を持つ存在であって、それ以外に第六感などが発達する可能性が潜在している」という考えをもっていました。この前提は古代からあったものですが、その頃にも普通に考えられていたことです。

人間は六感を持つものではない

人類が発達し始めた初期には、人間は自分たちの生きている世界を五感の現れにすぎないものとして認めていたのですけれども、利口になるにつれて人間は自分の周囲に起こる説明しがたい作用、すなわち外界にたいする知覚力を超越するかのように見える作用に気づきました。自分の見た物に首をかしげながら、しか

もこの現象を説明する肉体的感覚器官を持たないために、人間はこれを自分で考えついた領域、すなわち第六感ということにしてしまいました。その頃は(現在もそうですが)人間の感覚器官で説明できないものすべてを、この漠然とした神秘的な分野に投げ込んでしまったのです。

テレパシーが第六感であるという古くさい理論にもとづいた私の初期の研究は結局無意味でした。注意深い観察の後に私にわかつたことは、この理論と同じような考え方を応用している他の研究者たちも望ましい結果を得ていなかったということです。

生来私は、なにか自然界の宇宙的な法則に一致しないものが注ぎ込まれていると感じていました。そこで自然界に目を移して、その活動を調べたのです。すると、人間の推理力が干渉しないその自然界で私が発見したのは、万物は調和して働いているという事実でした。現象界でさまざまの姿をあらわしている生命体を注意深く観察して、ある正確な原型に従って働いている一つの英知すなわち法則が存在するにちがいないということに私は気づいたのでした。

自然界の驚異

南の微風(そよ風)に芳香をただよわせるオレノジの木は、大気の状態を科学的に分析して温和な気候だけが生存に適していることを知るのであります。この愛すべき木は自然の法則に従って自己の永続性

を保証しているのです。したがって自然界は気まぐれに寒帯地へタネをまき散らしたりすることはなく、日光の温かい土地にまくのです。

山腹に目をあげて、さほど遠くない昔でさえも人間がまねることは不可能であったと思われるような造化の見事な業を私は発見しました。まっすぐに、がっちりとして生えている頑丈なカシの木が、絶壁の斜面にしっかりと根を張っています。

この場合、木の重量の安定をはかるのにどの角度に根を伸ばせばよいかという問題を、自然界は計算器を使って計算したではありません。根はただ本能的に正しい方向へ、そして適当な深さに生えているだけです。

さらに私にわかつたのは、かりに私がノコギリでもって大きな枝を一本切り取ったとしても、自然界はもう一度その木の完全なバランスをとります。新しい根をはやして、ただちに重量の変化をおぎなうだろうということでした。

木の根元に生い茂っている野生のポピーや、斜面に点在するヨモギの茂みなども、すべてこれと同じ造化の原理を証明しています。

驚異に満ちた私の視線はゆつくりと動き、やがて足元の草に目がとまりました。ここにも創造の奇跡がありました。ほっそりした緑の葉を調べてみようと思ふとき、地上の人間はこの草の葉を創ることではないということでした。自然界だけがそのタネを発芽させ、その芽を固い土の中から日光の方へ導き、立派に成熟

させたのです。

たしかに、周囲で私のながめたものすべてが秩序正しく導かれコントロールされた英知の働きのなごりでした。偶然の生長というものはなかつたのです。微細な部分のごとくが注意深く出来上がっていました。適当な気候のなかに生長するオレンジの木、絶壁の斜面にしっかりと根を張っているカシの木、足もとの草の葉など、すべてが一つの「宇宙の英知」によって導かれ、存在せしめられているのです。

次に私は目を移して小鳥、昆虫、獣などを仔細に観察しましたが、このどれにもやはり同じ造化の驚異を発見しました。現代の建築に関する知識の多くは、自然界が応用している原理を研究して得られたということは注目すべき興味ある事柄です。

たとえば人間は勤勉なビーバーの土木上の能力を高く評価していますから、人跡未踏の地にこの動物をつがいのままパラシュートで降下させ、ダムを築かせて、毎年春季になると低い渓谷へ流れ込む大



▲ビーバー

洪水を未然に防いでいます。こんなふうにしてこの小さな動物は人間と自然の両方にたいして計り知れないほどの貢献をしているのです。

(訳注Ⅱビーバーはウミダヌキともいい、水陸両生の齧歯類動物。門歯が鋭く、後ろ足に水かきがあり、尾は平たい。水流を木や枝でせきとめて巣を作る。東京の上野動物園で見られる)

ビーバーが山間の流れのあちこちに築きあげたダムは、洪水と土地の侵蝕作用を最少限度にいとめていくからです。

しかもビーバーは数学上の計算を行って完成したダムに奔流が及ぼす圧力を算出するのではありませんし、ダムを堅固に打ち込んだり一定の高さに築いたりするのに機械類を使用しません。ここでも無生物界におけると同様、自然界の確かな指導の手を見出しします。

(原著者注Ⅱ現象における生物とか無生物とかいう場合、ごく普通の意味で私はそのような言葉を使用しますが、実際にはこんな区別はありません。生命の発現するものはすべて生きていくからです)

あらゆる次元の世界においては(たとえば昆虫、小鳥、獣などの世界)「生命力」が万物を生かしており、万物はまたある推理力を持っています。しかしこの生物と無生物は永遠に融合しあっているのです。そして地上で創造された最高の存在である人間は万物に依存しているのです。

自然界の相互依存性

自然界の複雑な融合状態をたどってみますと興味ある研究ができます。個々の物すべてが他の物すべてと織り混ぜられているのです。たとえば小さな昆虫と穴に住む動物は、共通の福利のために重要な役割を分担しています。彼らの地下の活動は土地の空気の流通をよくし、青草の繁茂を助けているからです。いまこの考えを一步すすめて、地上の生命体を永続させる上で昆虫が実際に果たしている不可欠の役割をとりあげてみることにしましょう。

もし昆虫が突然に姿を消したら地球上にいったい何が起るか、あなたは少しでも考えたことがありますか？ おそらく生物と無生物の両方にわたって生命は停止するでしょう。「母なる大自然界」は授精作用を行うために、この小さな生きものに大きく依存しているのです。花を繁殖させるのは花から花へ精出して飛びまわっているミツバチや他の昆虫であることを思い出して下さい。したがってこれらのものが果たしている絶対に必要な役割がなければ、あらゆる植物は絶滅するでしょう。

うろつきまわる獣から幼児を守るために作る巣の足がかりとしての高い安全な木の枝を小鳥はもはや持てなくなるでしょう。小鳥の食糧源としての昆虫、ウジ虫、毛虫などはいなくなり、山野の野イチゴは授精することなく、実を結ばないでしょう。

植物が死滅すれば草食動物は餓死してしまい、自然のエサを絶やしてしまった食肉動物も飢え果てるでしょう。こんな

れば食物を生物と無生物の両方に頼っていた人間は生きることができなくなるでしょう。

このようなことについて書物を書けばいくらでも書けるでしょうが、それでもこの問題を完全にカバーすることはできないでしょう。しかし私は右の簡単な実例からして、まじめな探究者ならば多くの現象に好奇心が起ると信じます。生きものの相互依存の理解が基本をなすのであって、その後人間は次のような真理、すなわち「実際にはあらゆる生命体はただ一つの「宇宙の英知」のあらわれである」ということが悟れるのです。

自然界の驚異を観察すればするほど、自分が万物と一体であることを私はますます深く感じました。生けるものすべてが同じ空気を呼吸しており、すべてが同じ太陽や風の祝福を楽しんでいるのであって、すべてがただ一つの根源によって生かされているのです。実際、差別というものには存在しません。万物は同じ「自然の法則」のもとに創られたのです。

動物はテレパシーの能力を持つ

さて、小鳥、昆虫、獣などを観察し続けて私が気づいたのは、彼らは気候の変化が起こる前にこれを知っているという点です。それまで私は他の人と同じようにそれは本能なのだと考えて満足し、それを神秘的な超感覚的知覚作用の領域にあてはめていたのですが、現在この答はもう私を満足させません。

当時私は地面の地形にたいしてカシの木に探知させ、正しい方向に根を導いた知覚力を理解したかったのです。というのは、動物界においてもこれと同じ本能すなわち知覚力がきびしい冬の到来をリズに知らせ、春まで生き抜くための余分の食糧を貯えるように警告している事実を私はいまや見ることができたからです。万物の創造主の最高の表現物である人間が、なぜこの探知力を持たないのでしょうか？

この解答は無言で、しかも確実な知識となつてやつてきました。

「受け入れようとしない人は、宇宙の英知」にたいして自分の心を閉じているのだ」と。

最高の英知を知るには

続く私の疑問は次のようなものでした。「この『最高の英知』に気づくようになるのに、どうしたら自分の心を開くことができるだろうか？」

私は身近な物事を探究し続けて、同時に、私たちが一小部分にすぎない太陽系にまでも思いを馳せたのでした。それは広大無辺の『宇宙全体』にほんの一步を踏み出したにすぎません。万物の中に決して分裂による断絶のない、絶えまなき融合を私は見い出しました。したがって私は孤立することができず、むしろ万物と一体だったのです。

この悟りによって次のことが明らかにになりました。つまり、万物が人間の内部に貯蔵されていて、解答は人間が自分自

身をよく知るようになるにつれて現れるということです。

「自分自身を知れ。そうすればあらゆることがわかるだろう」という有名な言葉を私は思い出しました。そのときまでは私もまたこの言葉の無限の深さに気づかぬままに、この深遠な真理をただオウム返しにくり返していたのです。

しかしいまや私は、無言ではあるけれども到る所に存在する『宇宙の共通語』にたいするカギを自然界が持つていることを悟りました。そして私の求める理解を見い出した場所は、この現象の世界だったのです。

私の分析は続きました。私の人間としての肉体はこの『宇宙の英知』によって存在せしめられたのですから、他の自然

物とともに私もまたその英知と法則の恩恵に浴しているにちがひありません。そうすると、なぜ私はこれらの天性に容易に目覚めなかったのでしょうか。

科学的にみて人体は人間が複製することのできない驚異的な構造を持つものであることを私は知っていました。私たちが食べる食物のエッセンスを日々抽出し分配する、いわば肉体内の化学研究所の働きも、肉体の果たす小さな機能の一つにすぎませんが、それさえも科学者はまだ十分に理解していません。これだけでも肉体の自然の活動は『宇宙の英知』のいろいろな法則に従っているという証拠になります。そうしますと、推理する心は全く現象の世界に沈み込んでしまい、同時にその根源を見失ってしまっているということになります。たしかに人間は「自分のよき才能を隠している」のです。次に私が直面した仕事は、この誤った考え方を追放すること、潜在する『宇宙の因』の存在を認めることにありました。そこで私は自分の心と肉体をいっそうよく理解しようとしてきました。それらはどんなふう作用するのか、それらの存在の目的は、といった事柄です。

この一連の探究によって私は次のような認識に到達しました。

「私を存在せしめた創造主は、力をもった『宇宙の英知』である」

人間は四つの感覚を持つ存在

私の地上の両親は私の肉体の出生にたいして一つの径路として役立ったにすぎ

ません。実は『宇宙の英知』の中のこの『力』が計画をたてて、私の肉体の建設を指導したのです。いかなる妊婦でも同じことです。母体はこの『主なる建設者』のために必要な材料を提供しますが、母体の内部で起こる創造の奇跡を妊婦がコントロールしているわけではありません。

以上のような考え方を押し進めてゆくうちに、私は一大発見をしました。妊婦にむかって、胎児が動くこうとする時があらかじめわかりますかと尋ねても、彼女は「いいえ」と答えるでしょう。彼女は赤ん坊の動きを操作することはできないのです。そしてそれが動いたという知識は、その行為が行われた後に、警戒すなわち『フィーリング（感じ）』として彼女にわき起こつてきます。したがって私たちが『フィーリング（感じ）』と呼んでいる彼女の感覚を通じて母体に知識を伝えるのは、英知ある力なのです。

言い替えば、『フィーリング』は万物の内部にある創造力です。したがってテレパシーが第六感だという定義は全く間違っていました。人間は五つの感覚器官を持つているのではなく、四つしかないのです！

テレパシーが実際に働く第五感すなわち『フィーリング要素』は、感覚器官ではなく、万物に意識的な警戒力を与える英知ある力なのです。

以上の説明は古くからとえられてきた説にたいして爆弾宣言にも等しいことを私は承知していますが、肉休人間が四つの感覚器官を持つという考え方は理論的に証明できます。（第二章完。以下次号）



▲ アダムスキーが本講座を執筆したバロマー山のバロマー・ガーデンズ住居跡に立つ訳者。

宇宙哲学とUFO 80号
静岡支部報 50号

発行記念祝賀会

●二月六日(日)午後五時半より

●静岡ステーションホテル8Fホール

●参加者 三十名

久保田会長が多年発行してこられた機関誌「宇宙哲学とUFO」が今回八十号となり、また静岡支部報も五十号の発行となり、この両方の発行記念祝賀パーティーが静岡支部有志会員の発案により開催された。

これに先だつて、この日は静岡支部の月例会の日でもあり、久保田会長は特別講演を行われた。支部月例会ではいつも



会長の声をテープで聞いていたが、この日は直接迫力ある生の声で聞くことが出来、出席者一同大感激であった。

講演内容も信念の重要性、円盤観測の重要性を強調され、会員に多大な激励を与えて下さった。

月例会終了後、祝賀パーティーの会場である静岡ステーションホテル八階ホールに移り、会員により準備万端整えられた会場で、北海道、九州、四国からもお祝いに駆け付けて下さった会員のみなさんを含め全員一列に並び、久保田会長を拍手でお迎えし、高梨氏の司会で発行記念祝賀パーティーは始まった。会長からご挨拶を頂いた後、光井氏から花束が久保田会長の手へ、そして支部会員一同から記念のトロフィーが久保田会長に贈られ、私(野口)には楯が贈られた。

筒井氏によって記念撮影が行われる。その後松山支部代表の伊藤氏の音頭でカンパいの唱和があり、なごやかな歓談となり、久保田会長の多年の奉仕活動と、今回の機関誌八十号発行に対して出席者一同、限りなき祝福をおくられた。

翌日は、前日宿泊された方など八名で、清水市方面にイチゴ狩りに出掛けた。その途中で高梨氏、筒井氏、松村氏、伊藤氏の四名は円盤を目撃するという出来事があった。昨年七月の静岡での大会の翌日を思い出させてくれるような、またまた感動の日であった。円盤も「宇宙哲学とUFO」八十号発行のお祝いに出現されたのだらう。久保田会長、多年私達会員のためにありがとうございました。

(野口敏治)

東京月例会でも 記念品を贈呈

去る三月五日、都内上野公園内の東京文化会館での本部月例研究会の席上において、「宇宙哲学とUFO」八十号発行と「静岡支部報」五十号発行を記念して、東京の有志十二名より久保田会長に大トロフィー、静岡支部代表・野口敏治氏に楯が贈られ、更に両氏に花束が贈呈されて多年の健闘が讃えられた。以下は有志代表の篠芳史氏の祝辞。

「今回の記念品贈呈にあたりまして一言、私たちはこの宇宙の中でたいへん素晴らしいものを学んできましたが、これについて数多くのご指導を頂きました久保田会長が機関誌「宇宙哲学とUFO」の八十号を先日出版されました。私たちは心から意義ある進歩を目指しておりますので、有志一同でお祝いすることとなりました。また静岡支部代表の野口氏にはこのたび静岡支部報の五十号を発行されましたので同時にこれも記念することいたしました。皆様もよろしくご賛同の程をお願い申し上げます」

久保田会長の挨拶。

「ただいまは有志の方々からたいへん立派な記念品を頂きまして有難うございました。厚く御礼を申し上げます」

昭和二十八年に私がアダムスキーと最初の文通を始めてから三十年、昭和三十六年にアダムスキーの要請により日本GAPを創始して二十二年になります。そ



の間さやかな活動が多数の方々々に認められることとなり、現在一千名弱の会員の方々にご支援を頂き、感謝にたえません。この記念品は私個人宛のものでなく全会員に贈られたものであると解釈して、今後いっそう努力しますのでよろしくお願い申し上げます。(松村芳之) 有志十二名は次のとおり。遠藤昭則、大野世津子、菊池啓子、越崎裕子、小島原竹子、佐塚崇子、篠芳史、田中正、松村芳之、松本隆司、山口緑、渡辺護。

北海道 特別夕食会

●ホテル・ニューキクヤ（旭川市）

●二月二十六日（土）

●出席者 十七名

前日やや吹雪模様だった旭川地方はこの日、朝にはすっかり晴れ上がり、気温もマイナス十五度と冷え込みましたが、日中には道路の雪も解け出し、午後二時過ぎ旭川空港に到着された久保田会長には、寒い北国のイメージもかなり柔らいだことでしょう。

今回の集まりは、会長を囲んで座談会のような和やかな雰囲気の問題応答を行い、会員一人一人がより一層会長との一体感を深めて、今後のGAP活動への活力とするためと、設立以来三年間、旭川支部の発展に多大な貢献をされた石川代表が上京されることになり、その送別会を行うために計画したものです。

午後六時より一時間の予定で質疑応答が始まり、「UFO目撃の重要性」「自然の変動とその諸説への対応法」「ニュースレターの中のある会員による体験談」等が主な内容でした。

夕食会では始めに吉田さんが挨拶に立たれ、苦勞の多かった設立当時の思い出と激励の言葉を石川氏に送られました。そして次に石川氏が皆さんへの感謝の気持ちと今後のGAP活動への決意を語って別れの挨拶とされました。

それからシャンパンの栓が抜かれ、会長の乾杯の音頭で送別の宴が始まりました。雰囲気盛り上がった頃、石川氏の

すばらしい歌が披露され、そして最後に参加者一同より石川氏に花束が送られて夕食会は終わりました。その後は二次会へ行き、ここでも石川氏を始め数人の方の歌を聞いたりして夜遅くまで歓談は続き、更にホテルの一室で別れを惜しんで午前三時頃まで語り合いました。

久保田会長にはご多忙中、寒い北国へ足を運んで下さり大変ありがとうございました。そして旭川支部を今日まで育てて来られた石川氏に心より感謝するとともに今後のご活躍をお祈りいたします。

（阿部堯）



第4回松山支部大会

●三月二十日（日）

●ホテル・シャトーテル松山

●出席者 四十五名

大会前日の十九日の晩にまず歓迎会がホテルで開かれて二十名の方が松山城の夜景をながめながら歓談を続けた。

翌日は快晴となり、全国各地から四十五名も出席されて盛況のうちに大会が開催された。佐々木朋子さんのおおらかであたたかい司会のもとに、中川敏恵さんの講演に引き続き、久保田会長が宇宙的な意識の拡大法についてきわめて重要な話をされた。その要旨は「金星人フィリング」ともいべきもので、肉体は地球上に住みながら意識の世界では金星にいるかのようなフィリングを起こすと、地球上の万物も聖なるものとして光り輝いて見えるようになるというもの、このような、かつていかなる地球人も起こしたことのないようなフィリングを起こす実践を先生はやっておられるという。またアダムスキー全集刊行をブラザーズも祝福された秘話などを語られた。

夕食会と同じホテルの別室ではなやかに開催され、三十四名が出席して旧交をあたためたが、特に五月に結婚される山形支部代表・清水正氏と松山支部会員・中川敏恵さんの二人を祝福して花束が贈られた。更に石川公一氏の歌と石田義雄氏のフルート演奏が錦上添花を添え、最後はGAP讃歌で幕をとじた。

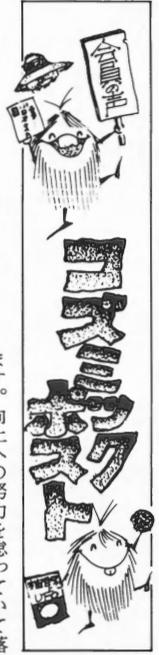
翌日は約二十名で貸切りバスにより市

内観光に出かけたが、中川敏恵さんはバスの窓よりフライパンをさかさにしたような上部にドームのある黒いUFOが雲の中へ入るのを目撃したという。

この地球という低次元惑星にいて、久保田会長のような偉大な指導者のもとに立派な会員の方々と一致協力してGAP活動が遂行できることは幸福の極みである。参加者各位に感謝したい。

（伊藤達夫）





中川真理子さんの記事に 感動

三重県 松口幸之助

このところ温暖な気候が続いておられますが、先生はお元気ででしょうか。「宇宙哲学とUFO」八十号をお送り頂きまして誠にありがとうございました。目を通しまして今回も重要な記事ばかりだと思いました。

中川真理子さんの「美しい惑星の思い出」を感動して読みました。写真と本名を載せて下さいましてうれしく思います。この記事を読みまして勇気づけられ、心がきれいに洗われられたような気がしました。見習はなくてはと思います。

80号の表紙もすっきりした見出しで良いと思います。これのほうが迫力があってよろしいかと思えます。A氏の未公開の写真をよろしくければどしどし載せて下さい。先生のUFO観測中の写真を見て見習はなくてはと思えました。僕はなぜか月にひかれます。

すごい中川さんの記事

東京 大野美智子

「宇宙哲学とUFO」八十号の中川真理子さんの記事はすごいですね。私は彼女に程遠い存在だとひしひしと感じ、考えさせられました。本当に精神的な成長は山登りと同じで、下るのは簡単ですが登るのは苦勞し

ます。向上への努力を怠っていて落ちていくばかりの自分を見出し出して気が滅入っております。でもGAPの会員である以上、彼女の記事に刺激されてがんばらなくてはと思います。

東京月例会はこのところずっと欠席していましたが、また出席させていただこうと思っております。目的を同じくする者同士の会合の波動にふれて私の心も共振させたいのです。私はレベルが低いので共振が起これば幸いです。

わが円盤目撃史

大分県 十菱 麟

相変わらず「ぢ」主として室内盤居中、八十号を贈って頂き感謝です。圧巻は中川真理子さんの手記。こういうすばらしい人が大兄にとつてのヒミコ女王としてすくすく成長されることを心から祈ります。心なき人の手にかかると幻視幻聴のレッテルを貼られ、アサイラムにも入れられかねないケースなので御愛護ひとしおにと願ひ上げます。

私の円盤史はSさん（アダムスキーONLYでした）との交わりから始まり、AZ期は家人（娘と女中）がしばしば池尻町への飛来を突見し、つづいて東京オリンピックの年に富士宮の道場で再三目撃、浅間神社境内では私の頭頂をつきさす如く鉛直上空に母船が数秒間滞留しておりま

した。次は大分市の杵原八幡宮そばの自宅で私の男の子の下（当時小一）がスプーン曲げをした時期（今から九年前）よく飛来しました。その後は絶えてありません（みすてられたのかも）。

今、「シエハラザード」を聴いています。何か時代が微妙に大きく変わりつつあることを切々と感じます。「燃えつき症候群」を克服したら又拝願したいものです。

白い円盤を見た！

東京 斎藤泰文

去る建国記念日の二月十一日、妻と二人で池袋で面白いモノを見ました。この日午後四時頃、妻と私はラーメンを食べたあと、フツとなげなく池袋へ来たのだからかの有名なサンシャインビルへ登つてみようと思ひ、六十階の展望台までのぼり、小さく見える人やクルマを見ながら二人で「こんな高いところからでも人」だとわかるんだね」とか「あれが首都高速か。あれじゃ交通事故も起ころうね。地球の乗物はどうしたつて重力に引っぱられて地面に押さえつけられているんだからね」とかいふ会話をかわしながら「今日あたり円盤でも飛んでないかなあ？」と、なにげなく池袋駅の近くの西武デパートのあたりに目をやっていた時です。

そしたら妻の津多子（夫婦共GAP会員）が「あれ、面白い物が飛んでる。あれ、なんだろう。白いようなもん見える。ほら、あそこ」と下を指します。私も西武デパートのあたりへ視線を移しましたら、ナルホ

ド野球のボールかパレーボールみたいな白い球形の物体が池袋の中心街からずつと北上してゆくのが見えました。

そうですね、私も仕事柄、名古屋ではヘリコプターやセスナ機に乗つて上から下を見ていることが多かったので、よくわかりますが、あれは絶対に地球の飛行機やヘリコプターじゃありません。ビルの六十階から丁度見おろす格好になりました。

その飛び方を約三十秒ぐらい、時間は午後四時二十八分から約三十秒です。一見して見ましたら、とても面白い飛び方をします。あのあたりも今頃は高いビルが建ちはじめ、十四〜十五階のビルが多いんです。そのようなビルの大体倍ぐらいの高度、そうですね、地上三十階のビルの高さぐらいの一定の高度を保ちながら、さも地上を偵察しているかのようにずつと北上して、かなりのスピードで飛んで行くんです。大きさは下の車と比較してみても大体車の半分程（直径が）ぐらいだと二人で計算しました。おそらく一メートルか二メートルぐらいのものでしよう。

その物体が地球上のごぼごぼの建築物との距離をほぼ一定に保ちながら飛んで行きましたから、それを上から見おろしていること、必ずしも直線ではないんです、飛び方が、でも三十秒もたたぬうちに池袋から埼玉県の戸田市の上空へ消えてゆきましたから相当のスピードです。時速三百キロぐらいは出ていたと推測されます。いろいろ考えてみるとどうしてもあの物体は円盤以外に考えられないんです。おそらく無人の偵察用円盤にちがいないという結論

になりました。妻と私はそれぞれ過去に円盤目撃の体験がありますが、上から円盤を見おろしたのは二人共初めてです。でもあの物体を下から見たら太陽の位置からしてたぶん黒い丸い形に見えたらうと二人で話し合いました。さつそこの日はワインを買つて帰り、二人で乾杯しました。

スペース・プログラムとは

新潟県 星 富治夫

昨年三月の松山支部大会では「宇宙とは何か！宇宙の側から見ると宇宙には何もない」という宇宙論が強調されているかのように見えました。が、先生の講演のテーマを注意深く検討してみました。「宇宙は無である」というよりはむしろ次のように点かておかれてはいることに気がきます。「目に触れるあらゆる物すべてが愛である。私たちは愛に包まれている。目につく限りすべての物を愛する。そしてケタはずれに雄大な愛のフィリングを起すことが最重要。人間ばかりを重視しすぎるために、周囲の万物と自分を切り離している。これでは自分と一定の境界を設けていることに自覚がない」

以上の事柄の意味するところを私なりに考えてみますと、スペース・プログラムというのは「この世界は、この宇宙は無秩序な混沌としたデータラメな世界ではなくて、我々は秩序正しい世界に生きているのだ」ということに気づかせようとするプログラムで、はいでしようか？

結局、スペース・プログラムの意図は、「宇宙には恐怖すべきものは



〈予告〉昭和58年度地方支部大会(その2)



	山形 仙台 合同支部大会	札幌 旭川 合同支部大会	大阪 支部大会	秋田 支部大会
日時	5月22日(日) 午前10:30→午後5:00	6月26日(日) 午後1:00→5:00	7月17日(日) 午前10:00→5:00	8月28日(日) 午後1:00→6:00
会場	「置賜(おきたま)総合文化センター」 山形県米沢市金地 ☎(0238)21-6111 駅から徒歩20分。バスは市役所行きに乗り、市役所前で下車。	「北農健保会館」 3階「芭蕉」の間 札幌市中央区北4条西7丁目 ☎(011)261-3271 国鉄札幌駅より西へ徒歩3分	「吹田(すいた)市民会館」 (部屋については当日入口に掲示) 大阪府吹田市出口町4番1号 ☎(06)388-7351 国鉄または阪急電車吹田駅下車アサヒビール工場西側、徒歩10分。	「彌高(いやたか)会館」4階広間 秋田市中通6丁目1-1 ☎(0188)35-1188 秋田駅から市民市場の方向へ徒歩10分。
会費	(希望者のみ全員記念) ¥2000 写真・送料共 ¥700 グランドキャビネ判)	¥2000 (写真の件は左と同じ)	¥2000 (写真の件は左と同じ)	¥2000 (写真の件は左と同じ)
プログラム	司会 田中義則 10:30 支部代表挨拶 清水正、笠原弘可 10:45 記録映画「エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅」 1:00 会員講演 本山恒明・伊藤睦史 2:00 講演「宇宙の法則の生かし方」久保田八郎 3:40 休憩・記念撮影 4:00 質疑応答 5:00 閉会	司会 小野陽子 1:00 支部代表挨拶 伊藤重信・阿部 堯 1:15 記録映画「エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅」 2:30 休憩・記念撮影 3:00 講演「GAP活動の意義」久保田八郎 4:00 全員自己紹介・質疑応答 5:00 閉会	司会 長浜富春 10:00 支部代表挨拶 平塚和義 10:10 記録映画「エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅」 12:00 休憩 1:00 会員講演・田中邦安 1:45 講演「宇宙の法則とは何か」久保田八郎 3:00 休憩・記念撮影 3:30 全員自己紹介・質疑応答 5:00 閉会	司会 伊藤正治 1:00 支部代表挨拶 佐藤春雄 1:10 会員講演・佐藤春雄 1:50 講演「UFO問題と宇宙哲学」久保田八郎 2:50 休憩・記念撮影 3:20 記録映画「エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅」 4:30 全員自己紹介・質疑応答 6:00 閉会
夕食会	大会終了後6:00→8:00までホテルサンルート米沢で希望者による夕食会を開催。 会費 ¥5000(清水正氏と中川敏恵さんの結婚披露をかねて行います)	大会終了後6:00→8:00までホテル丸窓で希望者による夕食会を開催(立食形式) 会費 ¥4000	大会終了後6:30→8:30まで別会場で希望者のみで夕食会を開催。 会費 ¥4000	大会終了後6:10→9:00まで同会館内の別会場で希望者による夕食会を開催。 会費 ¥4500
宿舎	「ホテル・サンルート米沢」をお世話します。 シングル1泊¥5000程度	札幌駅南口前「札幌ワシントンホテル」をお世話します。 シングル 1泊¥4300 ツイン 1泊¥7100より	「ホテル・コンサルト」(地下鉄御堂筋線西中島南方駅前)をお世話します。 シングル1泊¥4500(税・サ込) ツイン 1泊¥8400()	「秋田パークホテル」をお世話します。 シングル 1泊¥4000 ツイン 1泊¥7000
申込	夕食会・宿舎希望の方は宿泊日と共にその旨を記してハガキで5月15日までに下記へお申込下さい。 〒992 山形県米沢市松が岬2丁目4-31 清水 正 ☎(0238)21-5441	夕食会・市内観光・宿泊希望の方はハガキにその旨を記して5月末までに下記へお申込下さい。 〒065 札幌市東区北18条東6丁目、坂口マンション 伊藤重信 ☎(011)742-0192	夕食会・18日の見学・宿泊希望の方はハガキにその旨を記して7月10日までに下記へお申込下さい。 〒661 兵庫県尼崎市水堂町3丁目16-8 平塚和義 ☎(06)436-3478	夕食会・市内観光・宿舎希望の方はハガキにその旨を記して7月末までに下記へお申込下さい。 〒019-24 秋田県仙北郡協和町境字野田167-19 佐藤春雄 ☎(0188)92-3284
備考	大会翌日は希望者だけで天元台(スキー場で有名)へマイクロバスでドライブ。 ※5月は支部大会のため両支部共月例会は中止。	大会翌日は希望者だけで郊外へ観光を予定。 ※6月は支部大会のために札幌支部の月例会は中止。 旭川支部は6月の第3日曜日に月例会を開催。詳細は本誌40頁を参照。	大会翌日は希望者だけで吹田市万博公園内にある国立民族学博物館を見学の予定。 ※7月は支部大会のために月例会は中止。	大会前日は秋田パークホテルで希望者だけで歓迎会を開催。大会翌日は希望者だけで仁別国民の森へドライブの予定。 ※8月は支部大会のために月例会は中止。

※ 上記の他に10月9日(連休初日)には東京総会、11月20日(日)に熊本支部大会が予定されています。
詳細は次号に掲載。



▶日本平のUFO?

昨年(五十七年)七月五日、静岡市の東海地区大会の翌日、十数名で日本平へ登って写真と撮影したところ奇妙な物体が写っていた(矢印)。UFOか。

何もない。そこには楽しさ、喜び、幸福しかないんだ」ということ気づかせようとするプログラムではないでしょうか？
またブラザーズはどんな人に会っても微笑みの表情を浮かべて接するというのは、宇宙の本質を表現しているのではないのでしょうか？

秩序と調和、そして楽しさ、喜び、幸福という宇宙の本質に照らし合わせてみると、ウォルト・ディズニーマンが、あのような楽しい施設を作ったのもうなずけます。
さらにニューズレターのバックナンバーに連載された記事「進歩した思索家のために」の七頁第四段に記

述されている次の事柄も宇宙の本質に関連があるのではないのでしょうか。「私たちは外側にある天国をつかみ取る必要はありません。それはすでにここにあるのです。私たちはそれに気づく必要があります。形があるように見える物は、一時的な仮の姿にすぎないことに気付く必要があるのです。形ある物は去来しますが、その物を生み出す力は永遠なるものです」

●おめでた

大阪支部の会員同士である北口良次氏と渡辺貴子さんは去る二月十四日にめでたく結婚された。ご多幸を祈る。
今年には日本GAP男女会員間の結婚ラッシュ。めでたし。

■まず四月二十四日に宮城県柴田町の安藤澄雄氏が北海道帯広市の会員大橋博子さんとゴールデンの予定。式は挙げないが、同日開催の仙台支部月例会終了後、五時より別会場で支部より二人を祝福する披露パーティーを開くとの由。詳細は仙台支部代表の笠原氏宛に照会のこと。☎〇二二一九五〇〇七二五。祝電は一九八九一六宮城県柴田郡柴田町大字本船迫字内沼田九六一二、安藤澄雄氏宛。

■続いて四月三十日には神奈川県在住の神奈川支部会員・関高明氏が郷里の四国で宮崎敬子さんと結婚の予定。花嫁は非会員なるものと結婚の予定してみせるという。祝電は左記会場。〒七六三香川県丸亀市田村町二二六七番地、ニューグランドホテル気付

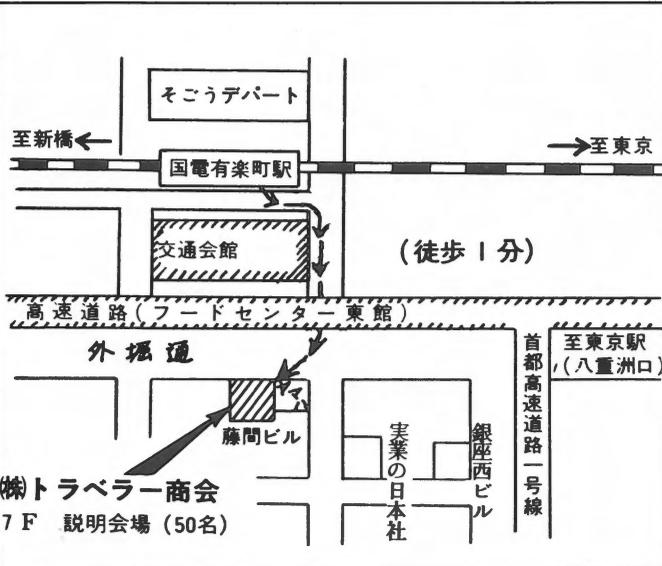
「エルサレム宇宙考古学の旅」第1回説明会

日本GAP企画第5回の今夏実施海外研修旅行のための第1回説明会を下記の場所で行いますので、参加申込者はもちろん目下考慮の方もぜひご出席下さい。重要なインフォメーションをお伝えします。(会費無料、筆記具持参)

日時 5月29日(日)午後1時より5時まで。
会場 トラベラー商会・7階説明会場

〒104 東京都中央区銀座2丁目2番19号 藤間ビル
☎(03)563-5461~2

※国電「有楽町駅」の「都庁口」に出て、交通会館の左側面ぞいの道路を100mあまり行くと、広い外堀通の角に出る。道路をへだてて藤間ビルがスグ前に見える。入口のエレベーターで7階へ。



同氏宛。三十日午前十時半よりこのホテルで挙式・披露宴を盛大に開催。■陽光きらめく五月二十一日、ついにロマン스가みのつて山形支部代表の清水正氏と松山支部会員・中川敏恵さんが、華燭の典を繰り広げる。この日は挙式後一般向け披露宴を開き、翌二十二日の山形・仙台合同支部大会終了後に両支部主催の夕食会を開催してこの席でご両人を祝福するとの由。祝電は左記宛に。
〒九九二山形県米沢市松が岬二丁目四一三一、清水正。
なおこの仲人は静岡支部代表・野口敏治氏ご夫妻が担当される。

■六月十一日には元旭川支部代表で現在は東京に進出している石川公一氏と山口県防府市の会員・藤本妙子さんが聖書の前で誓いを交わす。当日杉並区阿佐谷南一三三六九、襟懸館ホールで午後四時より教会形式の式を挙げたあと、五時より七時まで同館内で立食形式の披露パーティーを会費制(八五〇〇円)により開催。出席申込と祝電は左記へ。
〒一八六東京都国立市谷保五八三七番地、国立グレースマッシュン二〇二、石川公一
以上の他にまだあるが、次号で詳報の予定。

「生命の科学」1982年版
だれにもわかる
第2部刊行中！
1982年度東京月例会における久保田会長による「生命の科学」解説講義の講義録。深い理解を得るための必読の名著です。
B6版 活字タイプオフセット印刷
4~6月分 頒価500円 送料170円
申込先 〒980 仙台市五輪2丁目9-8(2F南)
☎(0222)91-7978
安藤澄雄 振替仙台7-30019
※第1部(1~3月分)在庫有¥700 〒170

「ジョージ・アダムスキー全集」刊行!

久保田八郎訳 全7巻 徹底的全面改訳

第1回配本
5月中旬発売

第1巻

宇宙からの訪問者

B6判/約340頁/本文上質紙/上製本箱入保存版/ ¥2500 ㊦250

偉大な進化をとげた惑星の人々とコンタクトしたアダムスキーが、驚嘆すべき異星の科学と超高次元な生き方を詳細に伝えた希有の書。アダムスキー研究者でUFO研究界の第一人者・久保田八郎氏により最終的に徹底的な改訳が施され、箱入豪華保存版として、ここにふたたび脚光をあびることになりました! 超絶した別惑星の大文明の真相を洩らす本書こそ混乱と分裂に満ちた地球に一大光明をもたらすでしょう。GAP全会員は本書を書架に飾って限りなく宇宙的感觉を高めて下さい。

アダムスキー全集 第1期刊行予定

- 第1巻 宇宙からの訪問者 昭和58年5月中旬発行
¥2500 ㊦250
- 第2巻 UFO問題の真相 昭和58年7月中旬発行
¥2500 ㊦250
- 第3巻 UFOとアダムスキー 昭和58年8月中旬発行
¥2500 ㊦250

第1期分[全3巻]予約受付中

予約特価 6000円(2割引) 送料 ¥400

申込締切=昭和58年6月15日 第1期分3冊をまとめて注文された方に限り予約特価で頒布します。お早目に直接小社宛ご注文下さい。申込方法は郵便振替または現金書留でお願いいたします。

アダムスキー全集 第2期刊行予定 昭和58年9月以降

- 第4巻 宇宙哲学
- 第5巻 テレパシー開発法
- 第6巻 生命の科学
- 第7巻 アダムスキー論説集

日本GAP機関誌に掲載されたのみで、まだ単行本化されていない論文集

文久書林

〒162 東京都新宿区榎町33
TEL 03(267)6920 振替東京4-2521

訪問地紹介

■**エルサレム** イスラエルの首都。キリスト教、ユダヤ教、イスラム教の聖都として世界に名高い都市です。人口は約30万。テルアビブから約70km。市内は城壁に囲まれた1km四方の旧市街と、西北に発展したモダンな新市街から成っています。大昔カナン人の土地でしたがメソポタミア方面からユダヤ人が侵入し、前1000年頃ダビデ王が都にして、その子ソロモン王は市内のモリア山に壮麗な大神殿を建立して栄華の極に達しました。その後、586年バビロニアのネブカドネザル大王がエルサレムを攻略して神殿は灰燼に帰したのですが、前63年にローマ帝国の属領となり、ときのヘロデ王が神殿を改築しました。イエスが出現したのはこの王の治世の頃です。以来2000年間、市内は多数の戦乱と闘争の場と化して変貌しましたが、イエス関係の遺跡としてはピア・ドロローサ（十字架の道）、聖墓教会（ゴルゴタの磔刑場跡）、オリブ山、ゲッセマネ庭園、シオン山、最後の晩餐の部屋、その他多くの場所が残っています。エルサレム到着後、真っ先に十字架の道（イエスが十字架の横木をかつがされて刑場まで歩いた道）を私たちも歩きます。

■**ピア・ドロローサ（嘆きの道。十字架の道ともいう）**
イエスの死後、母マリアが毎日城外の村からキドロン谷を上って、イエスがゴルゴタの刑場まで歩いた道をたどりながら、受難の場所ごとに立ち止まったという位置がステーション（留）として明示されており、その道のりを意味します。エルサレム最大のハイライトです。

第1ステーション 現在はフランシスコ会とシオン修道女会となっている位置で、ここでイエスはローマ総督ピラトの裁きを受けてムチで打たれた。ピラトが死刑を宣した場所。

第2ステーション イエスが紫色の衣を着せられ、イバラの冠をかぶせられてムチで打たれた場所で、ムチ打ちの教会という建物で覆われており、その中におずかの敷石が残っていますが、これこそイエスがゴルゴタまで歩いた道で残存している唯一のオリジナルの部分といわれている。

第3ステーション イエスが十字架の横木をかついで歩きながら最初に倒れた場所。

第4ステーション 母マリアが受難のイエスに会って激励した場所。

第5ステーション ローマ軍の兵隊がクレネ人のシモンという男をつかまえて、弱り果てていたイエスのかわりに木をかつがせた場所。

第6ステーション イエスを慕う女性ベロニカが、血と汗をふくようにとイエスにスカーフを差し出した場所。現在は聖ベロニカ教会となっている。

第7ステーション イエスが2度目に倒れた場所。

第8ステーション イエスが、ついで来た人々を振り返し、エルサレムの運命を予言した場所。ここでイエスは心配する婦人たちを逆に慰めた。

第9ステーション イエスが3度目に倒れた場所。

第10ステーション ここからは聖墓教会の内部となる。イエスが衣服をはぎとられた場所。

第11ステーション イエスが十字架にかけられた場所。

第12ステーション イエス終焉の場所。息絶えたときに地震でできたという白い岩の裂け目が2つの祭壇の下にある。

第13ステーション 聖墓教会の入口近くのホールに方形の石板があり、この上で十字架からおろされたイエスの体に香油を塗ったという。

第14ステーション 入口の左に祭壇があり、その下に小さな石室のイエスの墓がある。左手の白い石の台にイエスの体が安置された。

■**聖墓教会** 四世紀に初めてキリスト教を公認したローマのコンスタンチヌス帝の母ヘレナは熱心なキリスト教徒でしたが、325年にカルワリオの丘（ゴルゴタの丘）を訪れて十字架を発見し、この地に記念聖堂を建立したのがはじまりです。その後数度の戦乱で破壊され、現在の聖墓教会は十字軍が建てたのを1808年に改築したものです。上記の第10～14ステーションは聖堂内に含まれています。ここは要するにイエスの磔刑の場所です。

■**シオン山** 旧市街を囲む壁の南にある小高い丘。現在

は頂上に僧院があり、ダビデ王が居城とした場所で、王の墓もあります。昔ここにあった家ではイエスと12使徒が最後の晩餐を行いました。その部屋はいまも保存されており、これも見学します。ユダヤ人の国家建設を目指すシオニズムという言葉の語源にもなった丘です。

■**オリブ山** エルサレムの東のキドロン谷を隔てたゆるやかな丘陵地帯で、全山オリブの木で覆われています。イエスが弟子たちに説教をした場所として名高く、彼の最後の日に関係のある多くの教会があります。

■**ゲッセマネ庭園** イエスが最後の晩餐のあと弟子たちと共に来て、最後の祈りを行いながら夜をすごした所で静かな小さな庭です。隣の苦惱の教会の祭壇前にある岩の上にイエスが腰をおろしていたといわれています。

■**モリア山** 旧市街の中に高くそびえる山で、テンプル地区とも呼ばれます。3000年前にソロモンがここに巨大な神殿を建てましたが、のちにバビロニアのネブカドネザルに破壊されました。現在はイスラム教の岩のドームとアクサ・モスクが建てられ、メッカ、メジタに次ぐ聖地となっています。ここでマホメットが昇天したという伝説が残っています。

■**嘆きの壁** テンプル地区の西南にあるユダヤ人の聖地ヘロデ王の神殿の外壁であり、岩のドームを囲む壁の一部でもあります。神殿の破壊やバビロン捕囚などを悲しんだ古代のユダヤ人がこの壁に手を当てて泣いたといわれています。

■**イスラエル博物館** ユダヤ人と中東の宗教芸術の粋を集めたベザレル博物館、考古学・聖書博物館、古文書を集めた書物殿、高名な日系米人彫刻家イサム・ノグチ氏設計の彫刻庭園などから成る世界的な大博物館で、圧巻は書物殿の死海写本です。

■**ベツレヘム** イエス生誕地としてあまりにも有名なこの町はエルサレムの南約8kmの所にあり、立派なドライブコースで結ばれています。現在は誕生地の洞窟の上に大聖堂が建立され、内部の地下には長さ12.3m、幅3.13mの長方形の洞窟が保存されています。

■**死海** 海ではなく、長さ67km、幅17kmの巨大な湖で、水面は海抜下392mもあるため、上流から運ばれる塩化物が水の24～26%を占めて塩分が異常に多く、魚類は生存しないことから死海と名付けられました。ここで海水浴を行います。人間は絶対に沈みません。

■**クムラン洞窟** 死海の北、西側の湖畔約10kmの所にクムランの遺跡があります。1947年、2人のベドウィン人がこの洞窟中で亜麻布に包まれた羊皮紙の古文書の入った壺を発見して世界的に有名になりました。この遺跡はイエス在世の当時、エッセネ派（エッセン同胞団）が集団生活と宇宙の法則探求の場所としたところで、イエスも一時期この集団に関係したという説があります。

■**ガリラヤ湖** イスラエルの北方に位置するこの大湖はイエスにゆかりのある場所としてよく知られています。彼はこの湖畔で多くの快適な日を送り、かずかずの奇跡を行い、群集に宇宙の法則を伝えました。また何度も湖を渡り、弟子たちと共に家族的な美しい生活をすごしました。あるときイエスはこの湖水を歩いて渡り、弟子たちを驚かせています。私たちは水上を歩くことはできないので遊覧船で周遊します。

■**ナザレ** ガリラヤ湖の西方約25kmの山の斜面に存在するこの町には現在アラビヤ人が住んでいますが、イエスの時代はユダヤ人の町でした。イエスはここで幼少年期をすごしています。父ヨセフの家の跡に聖堂が建てられており、ここから600mほどの位置に聖母マリアの泉が残っています。

以上の他に多数の遺跡を見学の予定です。

「ニュージーランド・オーストラリア大自然の旅」を変更

第5回日本GAP海外研修旅行

エルサレム宇宙考古学の旅

宇宙の法則を伝えた偉大な指導者イエスの足跡を訪ねて

- 旅行期間 昭和58年8月13日より21日まで(9日間)
- 参加費用 ￥498,000 (分割払い可・月々約¥22,700×24回)
|(変動があるかもしれませんがのお含みおきください)

エルサレム！ イエスの宇宙的なティーチングと偉大な事跡を知る私たちにあって、これほどに魅力のある場所が世界のどこにあるでしょうか。一般に知られていないもう一人のイエスは、金星から地球に転生してパレスティナで宇宙の法則を伝えたあと、エルサレム郊外のゴルゴタの丘で磔刑に処せられてから、金星の円盤の放射線により蘇生してアメリカのデザートセンターに運ばれ、その地のインディアン部族の指導者として長い生涯をすごした方です。

2000年後の1952年、イエスは金星人オーソンとして、かつての12使徒の1人であったヨハネの転生した姿であるジョージ・アダムスキーとデザートセンターで会いました。この壮大な宇宙的ドラマの根源地は2000年前のパレスティナで、その中心はエルサレムです。この都市の内外はイエスと使徒たちの活動の本拠であり、かず多くの遺跡が残っています。

特にイエスが十字架の横木を背負わされて歩きながら途中3度倒れたピア・ドロローサ(歎きの道、十字架の道ともいう)と最期をとげたゴルゴタの丘(現在は聖墓教会)こそは私たちにあって地球最大の聖地であり、GAP会員必見の場所です。倒れたイエスを母マリアが抱き起こして激励した地点や、イエスを思慕していた女性ペロニカが師の血と汗をふくためにスカーフを差し出した場所などはランドマークにより示されています。エルサレムは3000年前にダビデ王とその子ソロモン王により繁栄した史跡に満ちた都市ですが、私たちはここ以外にもイエスの生誕地ベツレヘムや少年時代をすごしたナザレなどを訪問し、イエスが多くの奇跡を行ったガリラヤ地方の見学と風光明媚なガリラヤ湖の遊覧船による周遊も行います。死海での海水浴も一興です。

地球に生をうけて宇宙の法則を探求する日本GAP会員の皆さん、金星人イエスの足跡訪問を今生最大のハイライトとして実現させようではありませんか。久保田八郎とベテラン添乗員・田中が徹底的に検討して企画したGAPだけのこの手作りの研修旅行にぜひご参加ください。次元の高い多数の会員の方々の参加がすでに内定しています。旅行中は久保田と田中が親身のお世話をし、現地では優秀な日本人ガイドが案内しますし、参加申込者には説明会で詳細なインフォメーションをお伝えします。

イスラエル国内は日本と同じほどに治安が良好で、年間120万人の外国人観光客が訪れています。毎日3食付きで安心して素晴らしい旅が楽しめます。GAP独特の調和と友愛に満ちた感動の日々を聖地ですごそうではありませんか。

※ハガキで案内書を日本GAP宛お申し込み下さい。

日本GAP会長 団長 久保田八郎

企画・円 本 G A P

(通称大匠密着「旅」旅行第2号)

主催・株式会社日本旅行

(通称大匠密着旅行代理店第1957号)

販売
旅行代理店・ワールドセゾントラベル株式会社

Jerusalem

日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日 時	会 場	会 費	携 行 品 ・ 行 事
東京 本部	毎月第1土曜日 午後2:00→6:30	上野公園内「東京文化会館」4階会議室。 ☎03-828-2111。[国電「上野駅」の「公園口」下車。改札口の真向かいスグ ※7月と8月のみは皇居北の丸公園内の「科学技術館」6F会議室に変更。両月とも第1土曜日。	¥ 300	2:00→3:00会員による体験講演。 3:00→4:30久保田会長の「宇宙哲学」 講義と近況報告、テレバシー練習、休憩。 4:30→6:30自己紹介、意見発表、質疑応答。
大阪 支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00 ※7月は支部大会のため月例会は中止。	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」☎(388)7351。 国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。連絡先=平塚和義 ☎06-436-3478	¥ 300	テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」(文久書林刊)を持参。東京例会における久保田会長の講演テープを公開。テレバシー練習・研究発表・座談会
新潟 支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00	新潟駅前「青年の家」☎0252-44-6766 連絡先=足立亘宏 ☎0252-62-0968	¥ 200	テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」を持参。東京本部例会における久保田会長の宇宙哲学講義録音テープを公開。テレバシー練習、座談会。
熊本 支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	熊本市二本木3-12-45 常通寺 連絡先=津野田頼勝 ☎0963-52-3381	¥ 200	テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」(文久書林)を持参。久保田会長の東京例会における「宇宙哲学」講義録音テープ公開。座談と研究発表。テレバシー練習。
名古屋 支部	毎月第2日曜日 午後1:00→4:30	名古屋市中区古沢町7-1「名古屋市民会館」特別会議室。☎(052)331-2141 国鉄・名鉄・地下鉄「金山橋駅」下車。徒歩5分。 連絡先=林 国直 ☎0586-45-6468 武田充弘 ☎052-622-7339	¥ 300	テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」を持参。久保田会長の講演録音テープ公開。研究発表テレバシー練習、座談会。
仙台 支部	毎月第4日曜日 午後1:10→4:20 ※5月は支部大会のため月例会は中止。	仙台市「市民会館」会議室(西公園内) 連絡先=笠原弘可 ☎0222-95-0725	¥ 200	東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開、テレバシー練習、座談会。
山形 支部	毎月第1日曜日 午後1:00→5:00 ※5月は支部大会のため月例会は中止。	山形市小白川町「社会福祉センター」 山形駅よりバスで貯金局前下車・徒歩3分。☎0236-42-5181 連絡先=清水 正 ☎0238-21-5441	¥ 200	テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開、テレバシー練習、研究発表、座談会。
札幌 支部	毎月第1日曜日 午後1:00→4:30 ※6月は支部大会のため月例会は中止。	中央区北一条西一丁目「札幌市民会館」会議室。☎011-241-9171 連絡先=伊藤重信 ☎011-742-0192	¥ 500	テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」を持参。久保田会長の講演録音テープを公開、テレバシー練習、座談会。
静岡 支部	毎月第1日曜日 午後1:00→5:00 ※5月は支部大会のため月例会は中止。	ブラザー静岡ビル8階(静岡駅北口すぐ)静岡市御幸町9-1 連絡先=野口敏治 ☎0542-86-7729	¥ 200	テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」を持参。東京本部例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレバシー練習、研究発表。
旭川 支部	毎月第4日曜日 午後1:00→4:00 ※6月は支部大会のため第3日曜日に変更。	旭川市5条通10丁目「大雪婦人会館」3F ☎0166-23-6588 連絡先=阿部 堯 ☎01658-2-1585	¥1000	東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。研究発表。アダムスキー著「宇宙哲学」「生命の科学」を持参。質疑応答、テレバシー練習、研究発表。
松山 支部	毎月第4日曜日 午後1:00→4:30 ※5月29日は広島市平和公園隣の中国新聞社、7月24日は広島駅構内ステーションホテル会議室に変更。	松山市民会館会議室 連絡先=伊藤達夫 ☎0898-22-3060	¥ 200	テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。質疑応答、座談会。
群馬 支部	毎月第2日曜日 午後2:00→6:00	群馬県太田市「太田市民会館」第6会議室。 連絡先=服部 久 ☎0276-63-2163・2771	¥ 200	東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開、座談会等。
青森 支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	青森市松原「青森市民文化センター」 教養室(2) ☎0177-34-0163 連絡先=中根 豊 ☎01756-3-3386		テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。テレバシー練習、研究発表、座談会。
沖縄 支部	毎月第3日曜日 午後1:00→6:00	沖縄県宜野湾市真栄原80 下地算数教室 ☎09889-7-6478 連絡先=新里義雄 〒901-22 宜野湾市野嵩1547 マキシアパート	¥ 500	テキストとして「宇宙哲学」久保田先生による宇宙哲学解説テープ公開。質疑応答。想念観察とテレバシーの研究報告。自己紹介。座談会等。
秋田 支部	毎月第2日曜日 午後1:00→5:00 ※8月は支部大会のため月例会は中止。	秋田市八橋運動公園1-2「中央公民館」趣味の間。☎0188-24-5377 連絡先=佐藤春雄 ☎0188-92-3284	¥ 200	テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレバシー練習。座談会。
神奈川 支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00 ※8月のみ第1日曜日(8月7日)に変更し、第1研修室より会議室に変更。	神奈川県川崎市川崎区富士見2-5-2 「川崎市立労働会館」第1研修室 ☎044-222-4416。国鉄京浜急行「川崎駅」下車。市バス・ふ頭線・労働会館前 連絡先=千田光明 ☎0468-36-7198	¥ 400	テキストとして「宇宙哲学」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。研究発表、座談会等。

★本誌バックナンバー(旧号)★

わが国でアダムスキー問題を正しく伝える唯一の文献である本誌は後世に残る貴重な資料となるものです。ぜひおそろえ下さい。

No.77 主要記事「金星には偉大な文明がある!?'
「宇宙と愛について」(1)久保田八郎編/「反磁場による超推進法」W.ラポート/「さらば空飛ぶ円盤」5)第7章 疑う人に対する回答・第8章 デマとデマ流し屋/その他。

No.78 主要記事「火星に生命が存在!?'
「私は異星人から何を学んだか」G.アダムスキー/札幌市でアダムスキー型円盤目撃さる/アダムスキー型円盤、旭川に出現//沖縄支部大会の日に葉巻型母船現る!/'宇宙と愛について(2)'/「波よ静まれ、そして風も」久保田八郎

No.79 主要記事「イエスの聖骸布の謎」久保田八郎/「聖書とUFO」G.アダムスキー/「宇宙と愛について」(3)'/「円盤につきまといれた日」/「謎の巨石と太陽円盤の国へ」その他有益な記事を満載。

No.80 主要記事「ファティマの大UFO事件」久保田八郎/「美しき惑星の思い出」中川真理子/「GAPの意義・アダムスキーの著書」/「聖書とUFO(2)」G.アダムスキー/82年度日本GAP総会賛歌・講演録 その他。

各 ¥ 700。＊バックナンバーに限り送料は不要

「宇宙哲学」解説講義録音テープ

昭和58年度東京月例研究会において1月より毎月1～2章ずつ久保田会長が解説される録音テープです。アダムスキー哲学の理解を深める上の最重要な資料。会長の平易な説明と深遠な内容をぜひお聴き下さい。近況報告も含まれています。各支部必須のテープ。

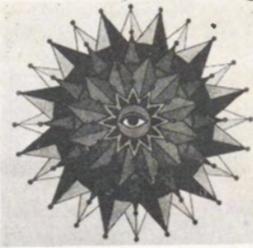
テープ1本(90分) ¥1000 千200

※このテープの注文に限り××月分と記して必ず下記へご注文下さい(58年1月より毎月録音 第1章より在庫)。

〒430 静岡県浜松市寺島町221、小島国弘
TEL.0534-52-8502/振替名古屋7-51065



①



②

①オーソン肖像写真 ②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第2部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウェルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。(キャビネ判)(カラー写真)

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は「すべてを見透す眼」で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。(サービス判)(カラー)

上記2点共、重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

①¥500千120 ②¥200千60一括注文の場合千120

③想念観察手帖

アダムスキーの宇宙哲学にもとづいて自己の想念印象を観察し、宇宙的想念と非宇宙的想念とに分類して記入する。宇宙的テレパシックな人間になるための必携品。1冊で1カ月分の記入が可能。¥500千120

④テレパシー練習用ゼナーカード

アメリカで開発されて世界的に広まったテレパシー練習用カード。5種1組のカードを1箱に5組、計25枚収納。美麗箱入り。¥500千120

日本GAP

会員募集

日本GAPはUFO研究界の大先駆者・久保田八郎が故アダムスキー氏と提携して1961年に創立したわが国最大のUFOと宇宙哲学の研究大集団/多数の会員と共に宇宙の人間を目指そう/入会案内書をハガキで日本GAPへ申し込もう/—日本GAP—

★月はUFOの基地?はまだほう大な資料があるのですが紙面の都合により簡略にしました。しかしこの記事はアダムスキーの体験記が真実であったことを立証する迫力ある内容です。

★私は異星人に守られている!もすごく興味深い実話です。これも内容が真実そのものであること編者が太鼓判を押します。

★「美しき惑星の思い出」は本号で完結しました。筆者の高次元な人柄をこれだけで充分に理解されたと思います。七月には結婚されるとの由、ご多幸をお祈りする次第です。

★先号編集後記で「宇宙と愛について」のシヨッキングな記事を掲載すると予告しましたが、これは読者が恐怖心を起こさせると思われるので掲載を中止しました。ご了承下さい。しかし宇宙哲学のいけばこの世に恐怖すべき物は何もありません。

★37頁の予告どおり、いよいよアダムスキー全集七巻が五月中旬より順次刊行されます。全面最終改訂の上、箱入り大製本となりますので皆様方の書架にぜひおそろえ下さい。この売行きが會員の発行中止になるおそれもありますから會員の方々は協力の意味でこそつてお求め下さるようお願いいたします。

★献本運動を始めよう!

★アダムスキー全集発行を機に、日本GAP各支部間で図書館や学校等へ寄贈する運動を展開しつつあります。これも知らせる運動の重要な一端をなすものです。特に第一巻「宇宙からの訪問者」が最重要です。ご協力下さいれば幸いです。

★今夏八月実施の日本GAP企画第五回「エルサレム宇宙考古学の旅」は好評裡に申込者

が増加し、四月八日現在で十五名に達しています。この調子なら三十名を超えるでしょう。本号39頁の広告には実施期間を八月十三日より二十一日までの九日間となっていますが、出発が一日早くなって八月十二日(金)の午後五時離陸となりました。しかし費用総額は変わりません。また申込金の五万円は別途料金ではなく費用の一部に充当するもので、キャンセルした場合は返さずから誤解なきように、安心して早目にお申込下さい。五月二十九日に東京で第一回旅行説明会が開催されますが、本号36頁の案内をご参照の上、考慮の中の一応ご出席下さい。

★本誌を書店に直接卸して店頭で販売する運動が会員五十名強の方によりすすまられています。地方の書店卸しにご協力下さる方は日本GAPまで一報下さい。説明書をお送りします。これは利益を追求するためではなく真の宇宙的カルマをもつ方が店頭で本誌を発見して覚醒するのを目的とするものです。

★去る二月四日には日本GAP青森支部の代表・中根賢氏がRAブラジロ・あおもりTODAYに出演、続く二月十九日にも同じくRAYラジオ番組「土曜スペシャル」に同氏と他の数名の會員が出演して、青森支部の活動状況がノンフィクションとして放送されました。

★今年七月と八月のみ東京月例会の会場を東京文化会館から皇居北の丸公園の科学技術館に移しますからお間違いないように。地下鉄東西線で竹橋駅下車、徒歩三分。タクシーは東京駅丸の内側より約十分、料金五百円台。会館入口の向かって右側のエレベーターで六階へ。日時は両月共第一土曜日午後二時からです。

日本GAP機関誌・季刊 夏季号
宇宙哲学とUFO 81号
編集発行人 久保田八郎
発行所 日本GAP
〒133 東京都江戸川区日本一色町365-1 818
TEL (03) 6551-0955 8
振替東京 4-359912
一九八三年四月二十日発行
定価七〇〇円・送料200円

★「想念観察手帖」は、宇宙哲学の理解を深めるための必携品として、多くの読者に読まれています。この手帖は、宇宙哲学の理解を深めるための必携品として、多くの読者に読まれています。この手帖は、宇宙哲学の理解を深めるための必携品として、多くの読者に読まれています。

編集後記

（K）

